

した社会状況にあって若い私には何んとも不合理な社会の現実言葉で言い表わせないものを感じ始めたものでした。そして、何かおかしい、納得出来ないと考えつつ日々過ごす中に差別事件が発生した。ある会社の招待旅行中に鷹飼町A氏が八幡町のB・C婦人に対して酒の酌をせよとせまり、拒まれると「エッタのくせに」という言葉が多勢の中で発せられたと言う事実であった。この重大な問題をどの様に対処すれば良いのか具体的な方法が見つけられずにいた。と言うよりは、私の町に部落解放同盟という組織がまだ確立出来ていなかった（その代わり、町内には「町を明るくする会」という組織が確立されていた。）ためであるが、私には、問題解決の為に取る方法に疑問を持たざるを得ないものがあつた。それは、まず当事者が「事なかれ主義」であつたのと、周囲は時間が経てば傷は治えると考えた様である。俗に言う寝た子を起すな方式であつた。私は何故、被害者の側が泣きを味わわねばならないのか、何故、被害者の側が身を正せば良いと考え、時と共に差別は無くなると考えるのか不思議でしかたがなかつたが、その時は、時の流れにまかせるだけであつた。しかし、自分自身には何んとも納得しかね、種々、書物をひもとくとき、私達の先輩が書き残してくれた中にすばらしいものを見つけた。それが水平社宣言であつた。これは、大正時代の人權思想（デモクラシー）の流れに沿って、生まれて来、「人權宣言」とも言われているものである。この水平社宣言の発せられるまでには幾多の、そして多くの先人達が熱き血と汗と涙を流し苦しみの中で読み上げたであらうと思ひをはせる時、運動の進め方、人間のすばらしさ、人間の生き方、人の血のあたたかき、愛することと、人の命の尊さを短い文章の中から読み取ることが出来た。大袈裟に言うとならわれるかもしれないが目には熱きものが溢れて来た事

神代期の近江

—『記・紀』神話に見る神神の居住地の一考察—

西川 秀夫

はじめに、

まず、何故、このようなことを調べようとしたのか、その動機について話してみたい。

そもそも私は、真宗門徒で、在家仏教徒である。大学も竜谷大学に行ったし、結婚式も仏式でしたぐらいであるから、仏教に関して他の人よりは、くわしいと自負しているし、仏青（YBA）活動も、ずいぶん熱心にやってきたつもりである。しかし、その反面、神道（しんとう）については、まったくズブの素人であり、知識もそれほどない。せいぜい、イザナギ・イザナミの神、天照大御神、スサノオのオロチ退治、海幸・山幸彦の話、大国主命の稲羽の白うさぎの話を、小さい頃に聞かせてもらったか、絵本で見た程度であつた。それが何故、神話などを調べてみようかという気持ちになったのかというと、私が働いている同和対策部事業課の職場で、仕事のこと、牟佐（武佐）神社に関する土地の買売に関する事業で、牟佐神社の祭神は、誰れだという話になり、『蒲生郡志』などを調べてみると、「八重事代主命（やえことしろぬしのみこと）」と書いてあつた。しかし、その八重事代主命が、どういう神の系譜にあたるのかというと全然わからないので、深井武臣（市職員で、大島・奥津島神社の神主）さんなどに聞いたりして、ようやく、事代主命

を覚えていた。

今、私達の周りにはいろいろな重大な社会問題が山積している。しかしながら、水平社宣言の発せられるまでの歴史を振り返って見ると、それら山積する諸問題に対する行動の仕方なり考え方が示されている様に思われる。例えば、国民の不平不満を大陸へ大陸へと向けさせる為に部落には地域改善予算を組む一方で軍国化へ進みそして部落に対しては、慈善同盟会等組織化を推進し感化事業を行い、不平不満を口にするのは自分達が悪いからであり、我慢を強要していくと言う方法を取っていた。その様な繰返しの中で『宣言』は発せられたのである。すなわち、今の社会情勢で言えば軍事予算は特に大きな伸びを示し、他の文教、福祉予算は削られている時、特措法の期限切れをまって、地域改善事業特別措置法と名を変えて、法制化し、事業化法を制定し被差別部落にはアメを、そして国民大衆の不平不満をネタミ的差別感を利用し眼をそらすうとしているとは言えないだろうか。私は、水平社宣言61年目に当りもう一度この宣言の中でうたわれている精神を充分に汲み取り、明日への糧とする必要性を感じている今日このごろであります。最後に、部落差別は神や仏が創つたものではなく、人間がつくり出したものである。以上、人間の手で必ず解決しなくてはならぬ問題であると言う事をつけ加えておきたいと思ひます。そして、部落差別の撤廃運動の高まりの中で長野県の高橋市次郎が「子供達に身代を残すより、自分らが受けて来た差別のやりきれなさ、屈辱をなくすこと、自由を残すことの方がどれだけ尊いかしれない」とさげんだ言葉は、私の今も変わらぬ気持であり人間の生き様への斗いであると言うことを表明しておきます。

人の世に熱あれ

人間に光あれ

一九八二年四月吉日

が、大国主命の子供で、出雲の国譲りに際しても、重要な役割りを果たした（『古事記』）ことが、わかつた。また、このついでに、私が住んでいる大房町の「弥弥芸志神社」について、調べてみたら、天照大御神の孫で、日向高千穂に天降つた「天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命（ニニギノミコト）」に関係している神社であることがわかつた。『蒲生郡志』によると、大房の、弥々芸志神社は、十禪師神社から分社されたものであつた。十禪師は、「十善師」とも書くが、ニニギノミコトを祭つてあるもので、大津の日吉山王七社権現のうちの一社であつた。日吉大社の祭神もついでに調べてみると『大己貴大神（大国主命）と、大山咋大神』であつた。大己貴大神（オオナムチ）は、大国主命の別名であり、そのほか八千戈神（ヤチホコノカミ）、葦原醜男神（アシハラシコオのカミ）という別名を持っていた。大山咋大神は建速須佐之男命の子の大年神の子で、別名「山末之大王神」といい、賀茂別雷命の父であることがわかつた。また、その昔、比叡山は、日枝山（日吉山）といい、古事記にも載っていたのである。

このようなことを調べていたら、だんぜん、古代神話に興味がわいてきて、『古事記』などを読みはじめたら、なにかしら、神話にでてくる地名や、神々が、滋賀県と非常に深く関係していることに気がついたのである。くわしいことは、次章からにするが、とりあえずは、一例を申し上げると、多賀大社の伊邪那岐命・伊邪那美命は、いうにおよばず、長命寺山の中之庄にある。「天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）」を祭る社（やしろ）と長命寺にある天祖教。そして、天照大御神が、天の岩戸に隠れたるとき、神々が集まりて相談したという「天の安河（アマノヤスガワ）」という地名である。これは、野洲川のことではないだろうか。その証左に、

近年、野洲の大岩山、通称甲山（かぶとやま）からは、多くの銅鐸が出土しているではないか。つまり、野洲川流域には、古代文化圏が形成されていたのではあるまいかと考えた。また、静岡の登呂遺跡に匹敵する大中の湖南遺跡、国民休暇村や大房等で発見されている数々の遺跡は、何を物語るのだろうか。以下、私は、これから次のように古代神話を推理してみた。これは、私からいうのもへんだが、推論である。確証たるや何もない。そのことをあらかじめおことわりしておく。

1 古事記に云う天地の初めの時

一 天之朝

「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。この三柱の神は並独神成り坐して、身を隠したまひき。（古事記）」

上記の三神について、私は、次のように推論する。

古代、原日本人のルーツについては、最近においても、いろいろと話題にもなり、諸研究が発表されているところであるが、いちおう、ここでは、天孫族ともいい、アマ王朝をきづいたアマ（海人）民族について示す。

- ① アマ民族は南方ポリネシア族に近く、親潮暖流に乗ってBC七〜八世紀に北九州に土着する。
天之御中主命に代表される。
- ② 紀元前一世紀初頭、漢の武帝が朝鮮へ南下したのに触発されて、アマ民族は、イサナギノ命に引率せられて、北九州から西

日本の近畿へ移動、『魏志倭人伝』の「北史」に云う「倭国」とは、野洲川流域に本拠を置く天の朝のことである。

- ③ アマ民族とは別に、モンゴリア系カム民族が、紀元前数世紀頃から渡来していて、山陰から東北にかけての裏日本に神代の国を形成していた。

カミムスビの神を代表する。

- ④ アマ朝以前から縄文土器をつくり、全国に居住していた先住民は、タカミムスビの神に代表される。

タカミムスビとは、他の神々という意味である。

「天の朝」のことについては、先に、「日本部落史の再考」という題で、書いたことがあるので、ご記憶の方もあろうかと思う。「高天原」というのは、「天の朝」の政庁であって、記・紀にも何ヶ所が出てくるが、それは、一ヶ所ではなく、何ヶ所かにあったものと理解する。そして、それらの中心地となるのが、近江の高天原である。伊邪那岐・伊邪那美の国産み、神産みによって、多くの神々が生まれるが、彦根市の名前の元となった、天津彦根命、活津彦根命をはじめ、「天の真名井」にふれて伊吹の狭霧となる神など、滋賀に関係する事が、多くある。「天の真名井」とは、琵琶湖の水を指すことばである。また、高天原のアマは、海とも書く。すなわ、高い場所にある海＝「高海原」である。

また、邪馬台国の卑弥呼は、「日御子」とも「姫御子」とも書くが、日＝太陽の御子であれば、天照大御神と同一次元である。

天照大御神も、数世紀にわたって何人もいたといわれる。邪馬台国というの、山々に囲まれたところという意味である。すなわち、近畿の盆地のことである。（一説には、邪馬台国は九州の北部、今でいう佐賀・福岡のあたりであったという書もある。しか

し、私は、邪馬台近江（近畿）説をとりたい。）

二 古代学説

ここで、古代日本史についての、現在のアカデミズム日本史学が提起している、いわゆる「定説」についてふれておくと、大要、次のようなものである。

- ① 旧石器時代、約十万年前にさかのぼることができる。
- ② 縄文土器、約一万二千年前にさかのぼることができる。そしてこれは、世界最古の土器である。
- ③ 弥生式土器人、紀元前二百年ころ、北九州などの西日本に始まり、東日本では、紀元三百年ころまでつづいたとみられる。約五百年間の歴史である。
- ④ 銅鐸文化。これについては、ナゾに含まれている部分が多くあるが、ほぼ弥生土器文化と重なるものと推定されている。
- ⑤ 古墳時代。これは、三世紀末に始まり、七世紀に終わるとされる。そして、この四百年間近くの歴史を初期・中期・後期の三時代に区分している。
- ⑥ 律令体制の開始、これは、大化の改新に始まり、壬申の乱の勝者、天武天皇以後確定的になったとされている。そして、文武天皇から聖武天皇にかけての七〇一〜七二四年の二十数年が律令体制完成の過渡期である。

ちなみに、『記・紀』は、この過渡期の産物である。

東大名誉教授の江上波夫氏によると、紀元前十世紀以降のスキタイに発した、鉄で武装した騎馬戦士の征服集団の波は、一千年余をついでして黒竜江まで達し、契丹・鮮卑・夫余までをまきこむ。そして、その波が日本列島にまでたどり着いたとするのである。

夫余族系の騎馬民族による日本占領は、二段階に分れてなされたと江上説は云う。すなわち、

- (イ) 朝鮮を基地として九州を占領する第一段階。これは記紀で云えば崇神朝に相当する。
- (ロ) 九州から、大阪・奈良などの近畿に進攻し、これを征服する第二段階。これは、応神・仁徳朝に相当する。四世紀末ころと推定。

日本民族は、弥生時代すでに成立しており、その民族を、大陸系騎馬民族が征服し、いわゆる天皇族の征服王朝による建国がなされた、と、江上説はしている。

この江上説から推理して結びつけると、『記・紀』神代史の眼目は、日本の最初の統治者天の朝が、天皇族によって亡ぼされた事を、古伝が抹殺した事にあると考えられる。大和朝側の古伝（古事記・日本書紀）は、天の朝の存在、及びそれを大和朝が亡ぼした事について、この事実をインペイさせようと極力努めているが、かくし切れずに、あちこちにその片鱗が現われている。天の朝と大和朝の斗いは、銅器対鉄器の斗いである。大和朝の勝利は、武器（鉄剣）においてまさったためである。

民間の日本史研究者である、菊池山哉氏の『天ノ朝の研究』によると、銅鐸は、天の朝の祭器であり、それは琵琶湖東岸の近江朝の都（天の朝、鏡山あたりと推定）で集中的に製造され、天の朝系列の各地に配布されたとする。この菊池説によれば、天の朝は稲作農耕の祭祀国家ということになり、いわゆる考古学者のいう弥生土器時代と重なっている。

天の朝が亡びたとき、征服王朝は、この銅鐸祭器を回収しようとしたので、各地の天の朝系列の人々は急拠、これを地中に埋め、

征服者の権力の追求を逃れた。と菊池説は、推測する。私も、この仮説は、野洲の甲山古墳等から、ほぼ、間違いなく、事実に近いものと考ええる。

また、彼は、滋賀県妙光寺山西の裾の古墳（通称ボケ山）が、もしかすると、卑弥呼女王の墳墓であるかも知れないとしている。そして、巨大古墳、埴輪は、天の朝没落後、征服者大和朝による産物とみる。

さらに、江上説を補強するものとして、東京外大の岡田英弘氏は、日本列島に侵入したのは、濃厚に中国化し、流民化した騎馬民族であろうとしている。この岡田氏は、中国の属国、植民地という視点から古代日本史を追及している人である。岡田説によると、日本書紀の歴代天皇のうち実在の人物らしいのは、仁徳天皇に始まる。すなわち最初の倭国大王は、仁徳天皇であろうという。これを「河内王朝」とする。清寧天皇の死で河内王朝が断絶したあと、播磨から新しい王朝が出現したとされる。顕宗天皇がそれである。この播磨王朝も、第三代の武烈天皇で断絶する。次に継体天皇の越前王朝がつづく。岡田説によると越前には、華僑のコロニーがあったとみる。また、日本列島に弥生文化を持ちこんだのは、中国の漢帝国の膨張やインドのアリーヤ人の移動に刺激されたヴェトナム地方に住んでいた越人だったのではないかともしている。

また、三王朝交代説をとる早大の水野祐氏は、記紀に云う神武天皇以下九代までの天皇は実在せず、架空のものであり、崇神天皇が初代のいわば原大和国家の大王であり、崇神王朝は、仁徳王朝に滅ぼされたと見る。そしてこの王朝は、権力者の内ゲバをくり返し血統が絶えてしまい、ここで越前地方から出た継体天皇が

あとを継ぎ、継体朝が始まる。とする。

江上説、菊池説、岡田説、水野説は、それぞれ、若干の差異はあるが、天の朝とされる天孫民族は、侵略者皇孫系によって征服されたというのは、ほぼ共通しているようである。（天孫系・皇族系は、区分するため私がかってにつけたもの。）

菊池説によると、三世紀中葉に近江に都のあった天の朝は没落している。これは、皇孫族の紀年でいくと、崇神朝の時代に相当する。（中国では漢滅亡後の三国時代という説もある。）

岡田説の紀年では、西紀三三三三ころに邪馬台国の倭王国が倒れるとしており、菊池説にいう天の朝の滅亡時と五十年ぐらいのズレがみられる。

ところで、この四世紀初頭は、中国大陆の政治情勢が、いわゆる五胡十六国の乱といわれる時代に突入した時代である。中国農耕文明の北方や東方の牧畜・遊牧民の騎馬戦斗集団が入れかわり立ちかわり、中国中原に侵攻し、領土分割戦争をくり広げている時代である。この状況は、隋の中国統一（五八九年）、唐の統一（六二八年）までの二〇〇余年の間つづけられるのである。

このアジアの国際状況を見ると、三世紀中葉にせよ、四世紀初頭にせよ、中国本土侵攻に向ったのと同じ傾向の騎馬戦斗集団による日本列島武力占領が行なわれた可能性がきわめて大きい。

この武力占領は、朝鮮半島を経由しなければならぬが、この当時、朝鮮には、高句麗・新羅・百済の三国が存在していたが、四世紀から六世紀半ばまでの中国本土の統一権力の崩壊状況において、高句麗・新羅・百済は、それぞれ競争して、日本列島に侵攻し、各自のコロニーをつくることになる。そして、このうち、百済系が結局ヘゲモニーを握って四世紀半ばにいわゆる、河内王

朝（仁徳期）を打ちたてたものと考えられる。

これは、まぎれもなく、中国文明と結びついた東北アジアの騎馬民族勢力による日本列島の武力征服であり、天皇族は、日本列島の外からの侵略者として四世紀以降に登場したのである。

ところが、AC五八九年の隋、六二八年の唐の中国統一は、アジアの政治情勢を一変させた。唐は、百済を滅ぼし（六六〇年）、高句麗を滅ぼす（六六八年）。そして、朝鮮半島では、新羅が唐的律令体制によって朝鮮統一に進む。この時点で、百済と倭（百済の日本での植民地）連合軍は、白村江で唐と新羅の連合軍に敗れ（六六三年）て、これで、倭国の軍隊は、潰滅状態になったものと考えられる。白村江敗戦直後、「郭務悰」を首長とする唐の日本占領部隊が上陸し、大海人皇子（一説には新羅王であったとされる）一派を取り込んで唐のかいらい政権をつくり上げる（『壬申の乱』）。藤原一族は、実は、この唐人占領部隊の指揮官にほかならない。この時以降、平安時代末期までの日本の政治権力の中枢にいきなりつづけた公家とは、唐占領軍、政治謀略部隊がそのまま日本に住みつき、自立した人々とその子孫たちなのである。その対極に居るのが、被征服者の天の朝等の日本原住民である。（ここに中世部落差別の原形が始まっているのである。）

白村江の敗戦後、唐が半ば日本を占領状態にいたということは、『日本書記』の記述によっても推測できることであるが、八切止夫氏は、『記・紀』は、日本の唐属国化が完了したことを示す、唐への報告書のごときものであると主張している。ここで、歴史の大きな偽造工作が天武朝系の権力によって行なわれたであろうことを我々は承知しておくべきだと考える。天武系権力による歴史の偽造の中心は、天の朝の関係であろう。そこで、も

う一度、近江天の朝を説く菊池説を、みてみよう。（『蝦夷と天ノ朝の研究』）、これによると、天ノ朝の起点は、西紀前八〇〇年（周の盛時期）と推定され、中国の正史に出てくるヤマトイ国がこの天ノ朝であるという。AC十二年、大和朝が成立するが、当初は、奈良県の磯城地方を支配していた小国であった。

「AC一六一年、天の朝が但馬と近江に分裂し、そして、それが天ノ朝没落の契機となる。この天ノ朝の内乱にクサビを打ちこんで大和朝が進出し、ついに二五八年「止与気女王」のとき天ノ朝は没落し、大和朝（崇神天皇）が政権を奪取した。と云う。それ以後、三八二年（神功皇后）に至る一二〇一―一三〇年の間、大和朝と天ノ朝残党の間に戦争が続き、仲哀天皇（三六二年）が、天ノ朝の系統の神功皇后（息長足姫命）と結婚するに及んで、この大乱も収拾されたとされる。」

私は、菊池山哉のこの説を、大筋において肯定したい。この説によると、天の朝は、約一千年にわたって存立していたことになる。そして、この国家はまぎれもなく、祭祀国家であり、祭祀の中心は、巫子である（アマテラス・ヒミコ）天ノ朝の中心は、近江の国にあって、日本列島のかなりの地域が天の朝の系列下にあったとされている。

そこに、かなり異質な皇孫族と称される一国がAC十二年に出現する。彼らは日向から大阪湾に上陸して山をこえ、奈良盆地に侵攻する。彼らは鉄製の武器をもった、大陸からの流民化した強盗武装集団であった。

十六世紀に、インカ帝国が、ごく少数のスペイン人の侵略者によって滅ぼされたように、祭祀国家は、外側からの攻撃に対してきわめて弱いのである。祭祀国家天の朝（ヤマトイ国）もまた、

海外から侵攻したひとにぎりの神武天皇（カムヤマトイワレヒコ）^{注1}
一党によって滅ぼされたのである。

しかし、この場合、征服者は、被征服者（天の朝の人民）に対して圧倒的に少数であったように、このために、やむを得ず、征服者は、天の朝住民の祭祀体系に多くの妥協を行なうことになったものと推定される。

このようにみえてくると、天の朝の農耕祭祀国家要素は、武力征服国家大和朝においても完全に滅びるのではなくて、或る程度、生きのびて来たのであろうし、この要素が大和朝から殆んど消え去るのは、聖徳太子、及び天武天皇以後のことである。ここにおいて歴史の書き換えがおこなわれたのであるが、『記・紀』などには、ところどころ、歴史の真実がみえかくれしている。それを、次章で、近江と関連させて、推論してみたい。

2 天照大御神、天の岩戸に隠れたる時 八百萬の神天の安の河原に神集ひて

一 民族移動

古代日本民族の祖先はどこから来たか——という疑問については、現在、南方渡來說が優力である。彼らは、ポリネシアおよび南アジアからやって来た。その説を証拠だてるものは数多くある。二月二十二〜二十五日、毎日テレビ（MBS）で午後十一時三十五分から、「日本人とは何か」という放送をやっていたが、やは



図1

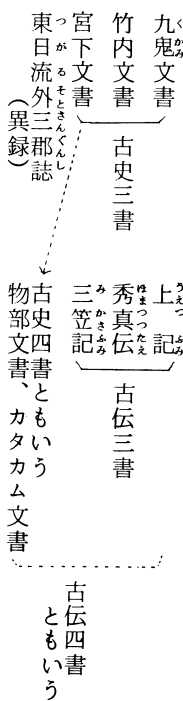
動の因果関係は、ほとんど分っていないようだが、インダスに起きたアーリア人の侵入が遠くインドシナにも波及してこの地域のもっとも古い先住民を追い出したことは十分考えられる。では彼らは、何処へ移動したのだろうか。内陸に行き場を失った彼らは海に逃れた。あたかも海のベルトコンベアー＝黒潮に乗って絶え間なく日本列島へ移動して来た。そして、紀元前の空白地帯だった日本列島を占拠したにちがいない。入墨も、フンドシと同様、彼らを持ちこんだ文化であったというのである。そして、稲作文化は、彼らをとおり、日本へもたらされたのである。この時期、日本へ移動したモンゴロイドとは別の分派で、ホツ・マツアを族長とする一派は、イースター島まで行き、モアイ文化をつくったという説がある。

二 古史古伝

普通、古代史の研究に際して用いられるのは、『記・紀』といわれる古事記・日本書紀のほかに、延喜式、新撰姓氏録、古語拾遺、などが用いられるが、このほかに、学界で非公認の資料もたくさんある。たとえば、『上記』である。選著者の名をとって『大友文書（おおとももんじょ）』とも呼ばれているこの歴史書には、神代以前の王朝・社会のことが事ここまかに書かれているという。『竹内文書（たけのうちのもんじょ）』や『宮下文書（みやしたもんじょ）』というのもある。『竹内文書』は、戦前に竹

り、南方渡來說をとっていた。では、彼らが北上する暖流に乗って来た最大の必然的な理由は何かあったかというと、一説には、マラリヤの脅威から逃れたいからであったと論じているものがある。今日でも、なおインドシナ・マレー半島は、世界で最も悪性のマラリヤの発生地域である。古代においては、人々は、ただこの猛威から逃れるためには高地へ行くか、北上して他の地域に移るしかなかったというのである。民族の移動を促した直接原因が流行病や風土病であった諸例は数多い。たとえば、歴史に名高い北方蕃族のフン族の移動は、彼らの家畜が流行病で激減したのが原因だという考え方もあるくらいである。また一説には、フン族の移動のような民族移動が、しばしば行なわれ、BC二〇〇年ごろ南方蒙古系のモン・クメール族が中央アジアより南インドシナに進出したり、インドのアッサム地方に進出し、カンジス川流域に進んだように、BC一五〇〇年には、ドラビダ人のインダス文明を滅ぼしたアーリア人が西方よりインド世界に侵入したのである。言うなれば、民族移動は一種の玉つきであったのではないだろうか、という説である。この紀元前に起こった南方世界における移

内宿祢の六十六代の孫と称する竹内巨磨氏が、『神代の万国史』を出し、不敬罪で天津教事件となったときに有名となった古文書で、神代文学で書かれている。『宮下文書』は、別名を「富士文書又は、「除福史談」と呼ばれているもので、内容は、秦の始皇帝が、不老不死を求めたので、臣の道師の除福は蓬萊山がある日本へ、船五百、男女五五八人を率いて渡来し、富士山麓に都を建設したとするものである。このような古文書（古事記以前の書）を「古史古伝」という。その代表的なものは、次のとおりである。なお、記・紀と旧事記、古語拾遺で古典四書という。



これらについては、吾郷清彦氏や佐治芳彦氏がくわしいので、本屋へ行って、これら二人の名前が載っている本を採って買ってもらえれば、よいかと考える。しかし、この古史古伝といわれる文書については、学界では、いまだにタブーとなっているものであることをつくくわえておく。

それでは、このような古史古伝については、いちおう、みなさん各自で研究していただくとして、ここでは、『記・紀』を中心に、近江と神代の神々とかかわりを紹介していくことにしよう。なおこれは、吾郷清彦氏の『近江高天原の発掘』及び『古代近江王朝の全貌』を参考としたものである。

三 琵琶湖は子宮

その前に、一つだけ、私が『記・紀』を読んで、ハタツとひら

※ 注1

神武天皇と崇神天皇は、同一であるとも考えられる。崇神（＝神武）天皇によってアマ朝は滅ぼされ、大和朝が始めるが、彼らは北朝鮮ツングースモンゴリア系騎馬民族王朝である。その後、彼らは南朝鮮クダラの征服者仁徳王朝系によって滅ぼされるのである。

めいたことがあ
るので、それを
記しておく。そ
れは何かとい
うと、イサナギ・
イザナミの国産
み、神産み神話
と琵琶湖の関係
である。

だいたい、琵琶
湖は、日本列
島を人間にたと
えると、腹部に
あたる。「近江
八幡は、日本の
ヘソ」である
という人もある
が、まさに、母
なる琵琶湖とい
うのであるから
女性にたとえる
ならば、琵琶湖

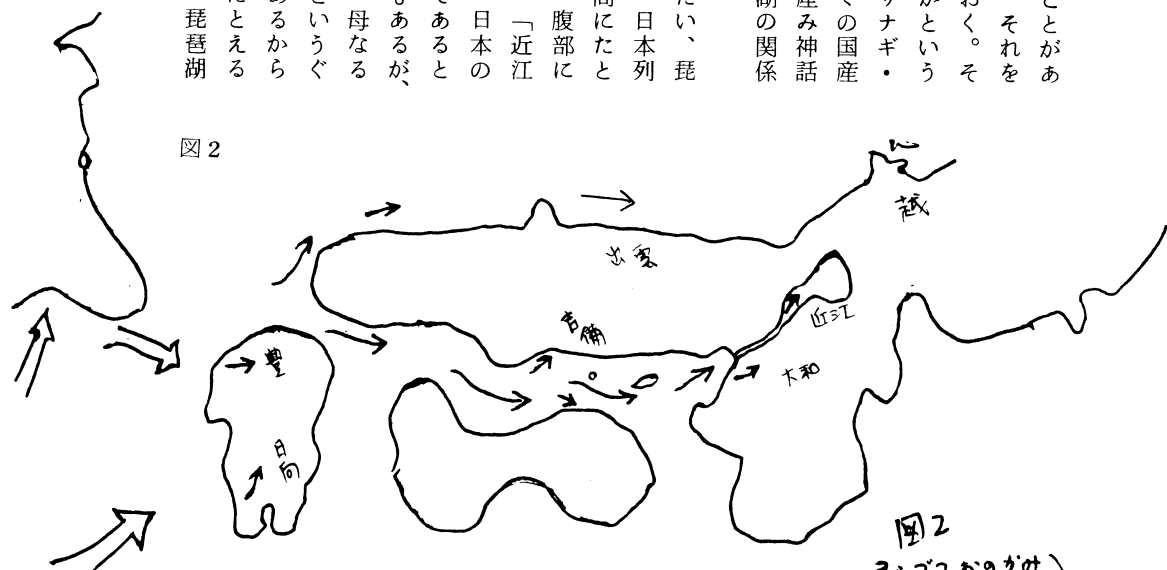


図2

図2

※注2 淀川—淀川の河口にある、住吉神社の祭神は、底筒男神
中筒男神、上筒男神の三航海神である

は、「子宮」である。そして、瀬田川と宇
治川と淀川と流れる川は、「産道」である。
その産道を通して「淡路之穂之狭別嶋（淡
路島）」「伊予之三名嶋（四国）」「小豆
島」「淡嶋」などの嶋や、「水戸神（みな
とのかみ）」「海神（わたのかみ）」「大
戸日別神」「天之吹男神」などの神々が産
み出されるのである。

しかし、私は、これを「逆説」だと考え
た。すなわち、暖流にのって南インドシナ
や朝鮮半島から九州に流れ着いた「天の朝」
の祖となる海人族は、九州から瀬戸内海を
通って、大阪湾河内平原に着く、さらに、
淀川を逆上って、ついに琵琶湖へ、着いた
のではないかとように考えていた。

『記・紀』に云う神産み、国産みの神話は、
北九州から瀬戸内海、さらに琵琶湖へと北
上する途中で、征服したり、支配下におい
た土地や、その土地の海人族の支配者の
名前ではないだろうかという考えがヒラメ
いた。しかし、これは、あくまで想像であ
って、確証はない。でも、その否定する反
証もないのである。舟で淀川を北上した海
人族は、琵琶湖へでた。そこは、海のように
に広いところだったので「高いところにあ
る海原＝高海原」と名づけたのである。し

※注2

淀川—淀川の河口に
ある住吉神社
の祭神は、底
筒男神、中筒
男神、上筒男
神の三航海神
である。

かし、琵琶湖には出たが、それ以上北へは行けないので、陸へ上
ったと考えられる。現在、長浜では、古代息長（おきなが）氏の
遺跡が発掘されていると聞くが、その息長氏族出身の神功皇后の
名前は、「息長帯姫命（おきながたらしひめのみこと）」である。
息が長くつく姫とは、なんと、「海女」そのものではないか。
また、中世には、琵琶湖にいた湖賊が有名となったのであるが、
案外、彼らは、海人族の子孫ではなかったのだろうか。

四 近江の高原

それでは、次に滋賀県内に残る神々の足跡をみてみたいと思う。
「故れ其の伊邪那岐大御神は、淡海の多賀になも坐します。」
「・・・是に速須佐之男命、各うけひて子生まな、と答
したまひき。故れ爾に各天安河を中に置きてうけふ時に、
天照大御神、先づ速須佐之男命の佩かせる十拳剣を乞ひ度し
て、三段に打ち折れて、ぬなともゆらに天之真名井に振り落
さがみにかみて、吹き棄つる気吹の狭霧に成りませる神の御名は、
多紀理毘賣命。亦御名は奥津嶋比賣命と謂す。次に市寸嶋比賣
命、亦御名は狭依毘賣命と謂す。次に多岐都比賣命。」

（三）柱。速須佐之男命、天照大御神の左の御美豆良に纏か
せる八尺勾之五百津之美須麻流珠を乞ひ度して、ぬなともゆ
らに天之真名井に振り落きて、さがみにかみて、吹き棄つる気吹
の狭霧に成りませる神の御名は、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。
亦右の御美豆良に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて、
吹き棄つる気吹の狭霧に成りませる神の御名は、天之苦卑能命。
亦御髪に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて、吹き棄つ
る気吹の狭霧に成りませる神の御名は、天津日子根命。又左の御
手に纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて、吹き棄つる気吹

の狭霧に成りませる神の御名は、活津日子根命。亦右の御手に
纏かせる珠を乞ひ度して、さがみにかみて、吹き棄つる気吹の狭霧
に成りませる神の御名は、熊野久須毘賣命。（井せて五柱。）
是に天照大御神、速須佐之男命に告りたまはく、是の後に生れ
ませる五柱の男子は、物実我が物に因りて成りませり。故れ自
ら吾が子なり。先に生まれませる三柱の女子は、物実我が物に
因りて成りませり。故れ乃ち汝の子なり。・・・

「・・・天照大御神、忌服屋に坐しまして、神御衣織らしめた
まふ時に、其の服屋の頂を窄ちて、天斑馬を逆剥ぎに剥ぎて、
墮し入るる時に、天衣織女見驚きて、松に陰上を衝きて死せに
き。故れ是に天照大御神、見畏みて、天石屋戸を閉て、さしこ
もりましき。爾ち高天原皆暗く、葦原中国悉に闇し。
此に因りて常夜往く。是に萬の神の聲は、狭蜷如す皆満き、
萬の妖悉に発りき。是を以て八百萬神、天安之河原に神
集ひて、高御産巢日神の子思金神に思はしめて、常世の長
鳴鳥を集へて鳴かして、天安河の河上の天堅石を取り、天
金山の鉄を取りて、鍛人天津麻羅を求きて、伊斯許理度賣命に
科せて鏡を作らしめ、玉祖命に科せて八尺勾之五百津之
御須麻流之珠を作らしめて、天兒屋命、布刀玉命を召びて、
天香山の真男鹿の肩をう抜きに抜きて、・・・」

次に示す図は、天之御中主命より天照大御神までの『古事記』
にあらわれる神々を、私なりに列記してみたものである。もれ
ているものもあるかもしれないが、いちおう参考に見ておいてほしい。

伊豆能売神、
 底津綿見神、
 底筒之男命、
 中津綿津見神、
 中筒之男命、
 上津綿津見神、
 上筒之男命

おはバツ めめのガム
大気都比売神
(アサノカミ 村田?)

夜芸速男神(火元炫昆古神, 火之迦具土神), 金山昆古神

以上のように、天之御中主神から、イザナギ・イザナミ、そして、天照大御神、スサノオノミコトの神生み、と、天照大御神の天の岩屋戸へ隠れたる時までを『古事記』でみてみたが、それと、滋賀県内に存在する史跡・資料とを、かねあわして、紹介してみよう。

- (1) 長命山靈在居縁起
景行天皇の時、竹内宿禰が、奥島山を開き、天之御中主神を祀るとある。その後推古四年、聖德太子摂政のとき、長命寺を建立したとある。―長命寺には代々「竹（武）内」と名のる住職がいる。
現在も、長命山々麓中之庄に「天之御中主尊神社」があり、この鳥居には、東郷平八郎謹書の額があるそうである。
- (2) 多賀大社
伊邪那岐命、伊邪那美命の二神を祀る神社である。
- (3) 天の真名井
琵琶湖のこと。万物の生命を生みだす母なる湖。
- (4) 天の安河
野洲川のこと。近年、野洲の甲山からは、たくさんの銅鐸が出土している。
- (5) 気吹
伊吹山のこと。この山にいた天の朝の雑党の伊吹（住民）族によって、大和朝のヤマトタケルノミコトは、苦戦している。
- (6) 天津日子根命、活津日子根命
天津彦根命・活津彦根命とも書くが、現在の彦根市の地名の語源となった。現在、安土から分社された神社が彦根にある。
- (7) 天之岩屋戸

図表4 八柱御子神一覧表（一）―大石凝説―

五男神					三女神			性別
熊野楠日命	活津彦根命	正哉吾勝速日 天之忍穗耳命	天津彦根命	天保日命 (天穗日命)	オキツシマヒメ	イチキシマヒメ	タキツヒメ	神名
蒲生郡能野 村割れ谷	奥石の石児 子	蒲生郡協児 の郷吾勝山	御金の塔 (彦根の産屋)	滋賀の石倉	東浅井郡び わ町	竹生島	(堅大島)	出生地
(甲賀郡新 宮)	犬上郡彦根	伊香具郡脇 児下の宮	大上郡彦根 錦亀川	蒲生郡奇日 野の大宮	同上			成長地
甲賀郡信楽 町長野 新宮神社	※天神社 (北野天神社)	八日市市小 脇町 (阿賀神社 太郎坊宮)	彦根市後三 条町 ※田中神社	蒲生郡日野 町馬見岡 錦向神社	都久夫須麻 神社			祭祀神社

栗太郡栗東町六地藏に、天照大神岩戸隠れの舞台たる「天ノ岩窟」がある。

- (8) 鏡
竜王町に鏡山がある。またそのとなりの三上山にある御上神社の祭神は、天津彦根命の子の天之御影命である。
秦荘町がある。もと秦氏は、織物の部である。秦氏は、秦の始皇帝の末えいであるともいわれる帰化人系である。
京都にも太秦がある。
- (9) 天衣織女
このほか、滋賀県内には、いろいろな神々の史跡がある。たとえば、八日市の「太郎坊宮」には、皇孫ニギノ命の父とされる正勝吾勝速日天忍穗耳命（まさかあかつかははやひあめのおしおみのみこと）が祭られているし、浅井郡の朝日山（通称、山本山）は、皇孫ニギノ命が降臨されたところであるとされている。また、大津市京町には「天孫神社」があるが、この祭神は、彦火火出見命（神武）、帶中津日子命（仲表）、国常立命、大國主命の四柱であった。高島郡にある白髪神社の祭神は猿田彦命であるが、この猿田彦命は、天照大御神が天の岩屋戸に隠れたる時に、今で云う、トリップをしたとされる「天宇受売命」と関係が深い人物である。中世賤民の「猿女」の祖となる神である。
竜王の鏡山には、鏡神社があるが、この祭神は、「天日槍命」である。この天日槍命については、あとで後述したい。
なお、次に、参考として、天照大御神と須佐之男命の子供としての三女神、五男神についての表を示しておく。これについては、大石凝説と森脇義孝説を記しておく。（ともに『近江高天原の発掘』に記載されているもの）

図表5 八柱御子神一覧表（二）―森脇義孝説―

五男神					三女神			性別
熊野久須日命	活津日子根命	天津日子根命	天善卑能命	天忍穗耳命	オキツシマヒメ	イチキシマヒメ	タキツヒメ	神名
社 錦向馬岡神	彦根市観音 堂	田中神社	油日神社	阿賀神社	奥津島神社	都久夫須麻 神社	佐久奈度神 社	祭祀神社
町 蒲生郡日野	彦根市観音 堂筋	彦根市芹川	甲賀郡甲賀 町油日	八日市市小 脇町	近江八幡市 島町	びわ町竹生 島	大津市大石 中町	鎮座地
大神命・武 大人命	当社の現祭 神・天穗日 命・武熊	大石凝説に 同じ	神は油日神 の三柱	勢多川の岸 辺に在る宗 瀨の辺津宮	奥津宮のこ とにて、奥 津山麓に 在り。	宗瀨の中津 宮	多川宗瀨	摘 要

以上、簡単に、神話の中の神々と近江とのかかわりを紹介したが、いちおう、天の朝（天の御中主命から天照大御神）が滋賀県にあったということは、概略ながら、わかっていただけたかと思う。まだまだ数多くの神々の足跡があるが、これらについては、省略する。

くわしいことは、前述の、吾郷清彦氏の『近江高天原の発掘』
『古代近江王朝の全貌』を参照していただきたい。

なお、湖西の鴨稻荷山古墳が朝鮮系であること。また、当時勢力を有していた和邇氏族や大友氏族の根拠地が湖西であり、三井寺には、大友氏の氏神である新羅明神（新羅神社）が現存することが明らかとなっているが、これは、もう少し時代が下ってからのことである。

最後に一点だけ、留意していただきたいことがある。岡山の水茎の岡の湖面に「水茎文字（ミズグキモンジ）」が表われるという伝承があることを、知っておられるであろうか。古代日本には「神代文字」と呼ばれる古代文字がいくつかあるが、「水茎文字」もその一つである。おそらく、天の朝^{ニギハヤヒ}近江高天原で使われた文字ではないだろうか。この文字については、玉田盛二氏が毎年賀状を、「水茎文字」で書いておられるので、ご記憶の方もあらうかと思うが、興味のある方は、玉田氏に聞いていただきたいと思う。

3 須佐之男命と高志の八俣遠呂智と大国主命

一 高志と越
『記・紀』の話にもどろう。天照大御神の天の岩屋戸隠れから、天の宇受売命、天手力男神、天兒屋命（藤原氏族の祖となる神）の努力によって、再び、高天原に君臨することになる天照大御

神は、ついに弟の建速須佐之男命を高天原から追放することになる。

そして、高天原から追放された須佐之男命は、出雲国へ行き、そこで猛威をふるっていた「高志の八俣遠呂智」を退治し、名田比売と結婚し、国づくりをするのである。一説では、その後、須佐之男命は、朝鮮へわたったとするところもある。

さて、ここで、問題となるのは「高志の八俣遠呂智」であろう。ヤマタノオロチとは、すなわち、ヤソタケルと同じに、「ヤ（八）の民」で、大和朝に反抗した者たちのことであろうと考えるが、「高志」とは何んであろう。おそらく、高志国というところだと思うが、ある人にいわせると、高志^{タカシ}高句麗だという説となえる人もいる。しかし、私は、高志とは越のことではないかと思う。越前、越中、越後に分れる前の越国である。

日本には、なぜか、越前・越中・越後、備前・備中・備後などと、三国に分かれている例が多い。これは、すなわち、前にもかいたが、新羅・百濟・高句麗の朝鮮三国が、日本にコロニーを競って作った結果ではないかと考えた。朝鮮も元は、馬韓・弁韓・辰韓の名前に分れていたことがあるぐ

※注3

須佐之男は、素佐鳴尊とも書くが、この神は、朝鮮系渡神で牛頭天皇（インド神^{ニンド}）の祇園精舎の守護神であるともされている。

京都の八坂神社の祭神はこの素佐鳴尊とその妃の稲田姫命であるが、稲田姫命は、古代メソポタミアの女神イシュタルである一説ではされているように、この素佐鳴尊は朝鮮半島に渡来したインド・マレー経由のメソポタミア系の海洋神^{ニミ}すなわち海人族ではなかっただろうか。また一説では天宇受売もベルシア系であるという説もある。サノオのササは、メソポタミアの古代都市名である。

ぐらいである。

とにか、越国が三つに分れる前の国が、高志ではないかと考えた。次の図をみていただきたい。

当時、古代から、出雲と越の間には、海路の高速ルートがあったようである。出雲族と越族は、古来より交流をしていたのではなからうか。その証左に、『記』では、大国主命は、

図6



高志の国の沼河比売とも結婚している。また、出雲の国譲りの際、それに反対した大国主命の子の建御名方神（タケミナカタノカミ）は、高天原軍の建御雷神（タケミカズチノカミ）とスモウをとり、両手を建御雷神にとられて、信濃の諏訪湖まで逃げて、その諏訪神社に祀られているが、おそらく、建御名方神が逃げたルートも、海上のそのルートであろうと考える。

また、『日本書紀』によると、斉明天皇のとき、越国守であった安曇族の阿倍引田臣比羅夫は、船団をたてて、「鮑田・野代」など陸奥（みちのく）の蝦夷を伐つとある。この安曇族は、海人族ではなかったであろうか。すなわち、天の朝のアマ族につながる者である。この安曇族が、滋賀県にも住んでいたと考えられるところがある。すなわち、高島郡の「安曇川」である。このほか全国各地に安曇（アズミ）という名が残っている。たとえば、三河湾の渥美半島、長野県梓川流域の安曇、山形県の温海、その他、熱海、会津等である。安曇族は、海人族の大勢力ではなかっただろうか。彼らも神代の民であった。しかし、その後、侵入してきた北方騎馬民族である大和朝廷の先祖たちや、百濟・唐系の政権によって

※注4

「八俣遠呂智」ー遠呂智族は、鉄を製造する技術をもった人々であることが、古代史研究家のなかではよく知られている。このことから彼らも海人族であるということがわかれると思う。鉄は、ヒッタイト・メソポタミアから伝来したのである。

※注5

馬韓・弁韓・辰韓ー桜井光堂氏によると「豊葦原千五百秋瑞穂国」は、豊国（九州の豊国）、葦原の中つ国（出雲）、秋（安芸）国、千五百国（周防）、瑞穂国（吉備国）の五ヶ国を示すものであるとしている。これは、のちに朝鮮の馬韓国の系列の葦原帝国（イザナミ女王）と豊王国（朝鮮の辰韓の支配をうけていた）のイザナギ王の結婚によって、両国を主

追われて日本各地に逃散したのである。―のち、彼らは、夷津の夷東の北条氏のように、源氏と共闘して、政権をとるのである。

二 大國主命（オオナムチノカミ）
オホナムチノカミ

イナバの白うさぎで知られる大國主命は、のちには、七福神で知られる〃大黒さん〃になるのであるが、もとは、インドの神で、暗黒神である。(〃シバ神)

また、大國主命の子で、出雲の國譲りの際に重要な役割をはたす事代主神（ことしろぬしのかみ）は、〃夷（えびす）さん〃になる。ともに、大和政權からみれば異端である。

ところで、大國主命は、『記』でみると、須佐之男命（素佐鳴尊）の六世の孫であり、スサノオの娘須勢理毘売（スセリビメ）をめとることによって、須佐之男命の子となるわけである。大國主命は、八千弋神（やちほこのかみ）、大己貴神（おおなむちのかみ）、葦原醜男神（あしはらしこおのかみ）などの名前をもっているが、それとは別に、大物主神（おおものぬしのかみ）又は大國魂神（おおくにたまのかみ）という神とも同一視されている。すなわち、大國主命の和魂（にぎたま）が、大物主神であるというようににされているのである。この大物主神は、奈良の三輪山にある「大神（おおみわ）神社」に祭神として祭られているが、『記』によると、この大物主神が原因で、天照大御神は、大和から伊勢へ移動させられるのである。これは『記・紀』でいう崇神天皇のときである。（大物主神を崇る氏族は、大三輪ノ君系と加茂ノ君系で共に葛城一族であるとされている。）

梅原猛氏によると、「三輪の大神神社があるように、オオクニヌシを祭神とする出雲族（私は、これも天の朝の海人族ではないかと考える。）は、もとは大和に根拠地をおいていたが、神武天

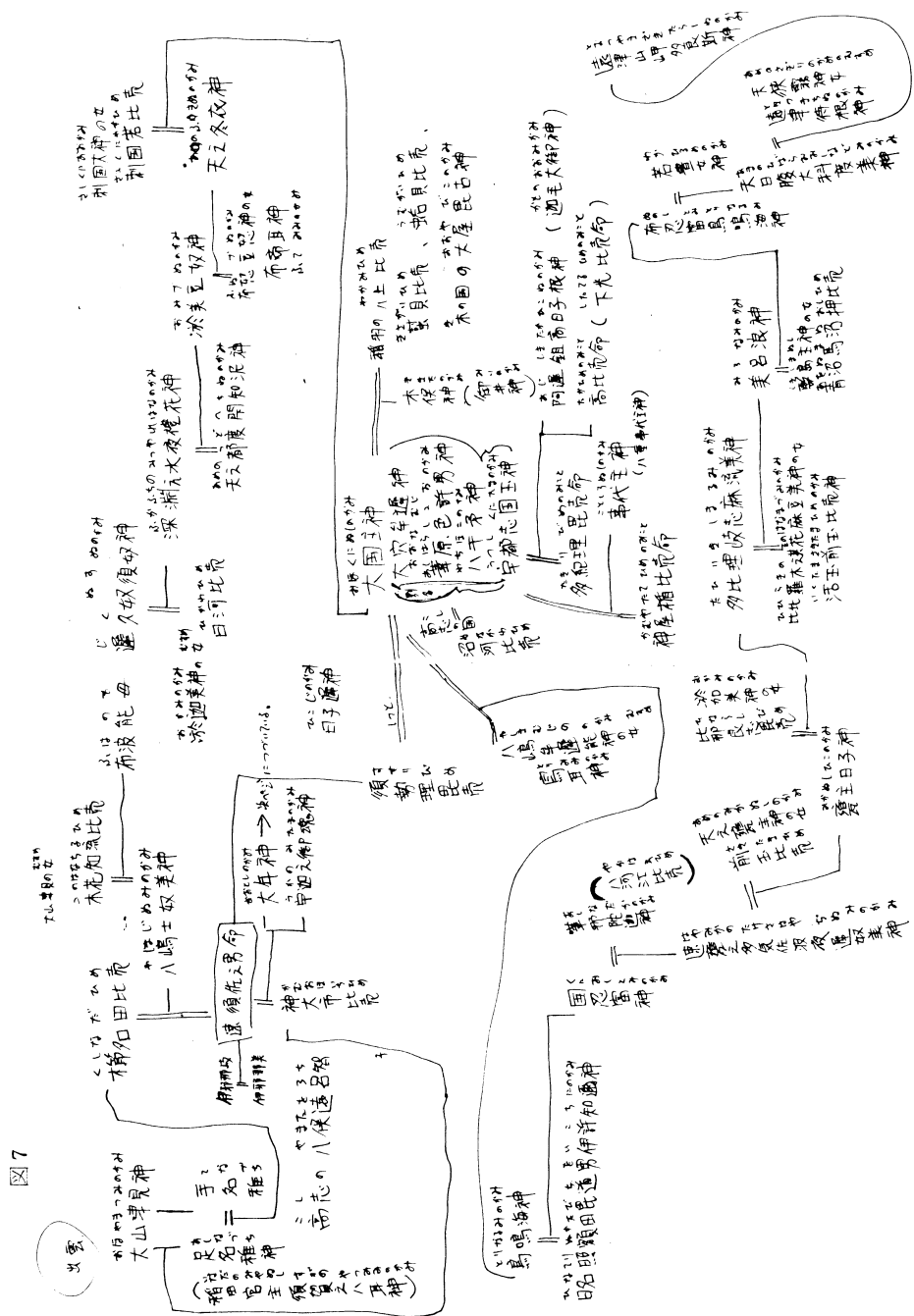
皇を中心とする征服者の侵入によって、出雲地方へ追いだされたのである」としている。梅原氏のこの視角には、私も賛成したい。

『記・紀』を読んでいると、どうもそう考えなければ、話のつじつまが合わない部分があるのである。梅原氏は、「おそらくそれが出雲の国譲りの真相ではないだろうか」と書いている。

たとえば、出雲神話にてくる「少名毘古那神」である。彼は、天之羅摩船（あめのわかふね）に乗って、出雲に天降（あまくだ）て来て、大国主命と共に、国づくりをするのであるが、もう一人天之岩船（あまのいわふね）に乗って天降（あまくだ）だつてくる神がいる。「邇芸速日命」（ニギハヤヒノミコ）である。ニギハヤヒノミコトは、神武東征の当時、大和地方に勢力を誇っていた出雲海人族の長髓彦（ナガスネヒコ）の妹と結婚するのである。その子孫が物部氏である。天の船に乗って天降る神はこの二人しかいない。）私は、このナガスネヒコこそが、オオクニヌシの出雲族の後継者であり、このナガスネヒコが支配していたヤマト地方こそ邪馬台国ではないだろうかと考え、以前そのようなことを書いたことがある。次の図は、「古事記」

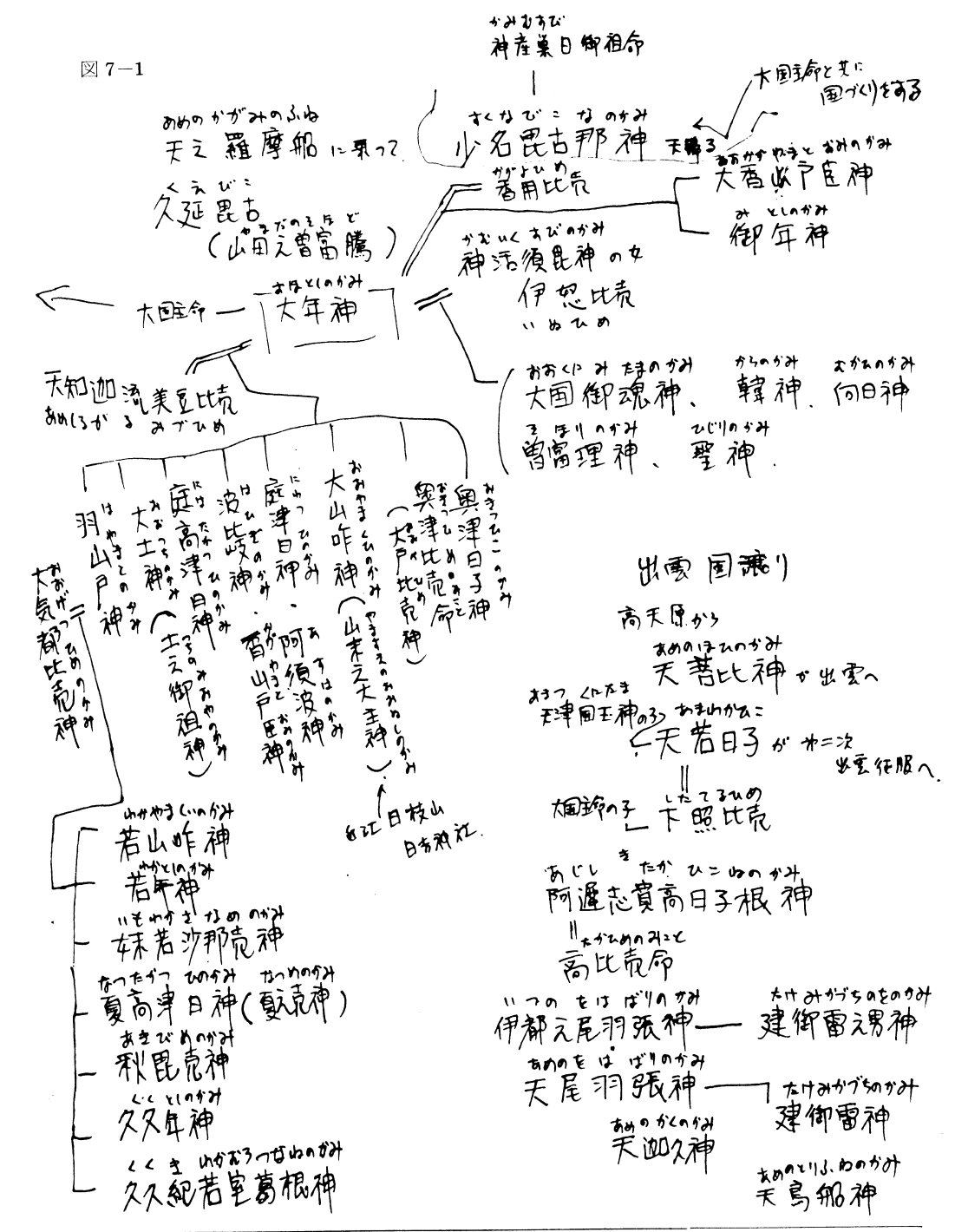
とする五ヶ国連合国家をつくりあげるがイザナギの野心とイザナミ女王の死によって連合は分裂し、両国は開戦する。そこでイザナギは三人の子のうちアマテラスには勢力の劣えた朝鮮（馬韓）を攻略させ、ツキヨミノミコトには、五ヶ国連合の植民地たる四国を統治させ、スサノオには葦原国を侵略支配させるのである。このかんスサノオは、一度朝鮮統治にのりだすがこれに失敗して大乱を誘発したため、朝鮮から手をひき出雲に帰還している。しかし、スサノオの跡をついだオクニヌシは、近畿（ヤマト）以東に勢力を持つ大倭帝国（ナガスネヒコ）と手をつなぎ出雲王朝の黄金時代をつくりだしたため、朝鮮のアマテラス側はニギギを派遣して、領有権の

から抜きだした出雲の神々の系譜である。参考に願いたい。



正統を主張する。やがてニニギの子孫・神武天皇の日向王朝（豊国）が東征にのりだし、出雲王朝と妥協し、大倭帝国（ナガスネヒコ）を亡ぼし、大和王朝（三輪王朝）をうちたてるのである。としている。くわしくは、氏の『古事記は神話ではない』を参照願いたい。ちなみに馬（マ）、辰（シンル）弁（ミム）の三韓は、のちに馬韓↓百濟、辰韓↓新羅、弁韓↓任那の三国となる。なお、氏は、この著書のなかで、オオクニヌシがイナバのシロウサギとワニの部族間の紛争を解決する話を書いているが、おそらく、このワニ族というのは、近江の湖西に勢力をはこっていたワニ氏族（海人族）のことであろうと私は考える。このワニ族は応神、仁徳朝を支えた一大

図 7-1



勢力で応神期（4世紀末〜5世紀）には、日本海上の海人族を掌握し、朝鮮半島まで侵入し、高句麗好太王にはね返されている。

※注6
安曇族―当時彼らは九州の宗像地方、出雲・越、地方及び信州、関東にまたがる勢力をきづいたと思われる。高志族やワニ氏族と同種と考える。一説では、安曇族は、マレー半島經由のメソポタミアからの海洋渡来民であるともいわれている。

4 ニニギノミコトの降臨から

神武の東征へ

一 ニニギノミコト

天照大御神の左耳の「八尺句珠之五百津之美須疏珠」が「天の真名井」にふれて、「気吹の狭霧」と成ることによって、「正勝吾勝速日天之忍穗耳命」が生まれるのであるが、その子に「天津日高日子番能邇邇芸命（ニニギノミコト）」がいる。

『記』によると、このニニギノミコトは、藤原氏の祖となる天児屋命や猿女の祖となる天宇受売命やその他思金神・手力男神などをつれて高天原から天降り、途中で「天之岩位」に立ちよってのち、筑紫の日向の高千穂に天降ったとある。

いったいこれはどういうことなのであろうか。もし、高天原を、近江と仮定するならば、「気吹」の「天之忍穗耳命」までは、近江と関係あるとしても、ニニギノミコトが、日向高千穂へ天降る過程が不明なのである。どういう経路で滋賀から九州まで行ったのかということである。

前章の二でも少しふれたように、「太郎坊宮」の天之忍穗耳命に云われて、ニニギノ命が、降臨するのは、西浅井郡の「山本山」である。おそらくここが、『記』でいう「天之岩位」ではないだろうか。そして五人の高天原の神々を従がえて、天降る途中で、出合うのが、白髪神社の祭神である猿田彦神である。

そして、ニニギの一行は「天之八重多那雲を押し分けて、いつ

のちわき、ちわきて、天浮橋にうきじまりそりたして、筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降り」をするのである。

私は、この疑問点を解決するに、二つの方法を考えた。一つは、このニニギは、天の朝で海人族であるので、海路を船で、琵琶湖―瀬田川―淀川を通り、瀬戸内海か、紀州沖―四国―九州の外回りで行くか、山陰へ抜けて、「天の橋立」から九州へ行くかの方法。これは、「天之浮橋」を「天の橋立」と仮定した場合である。

いま一つは、天の朝のニニギノミコトとは別に、朝鮮半島を経由して、九州へ上陸した、騎馬民族系のニニギノミコトが存在したのではないかとする方法である。

『記』を読んでみると、どうも、後者の考えの方が、すっきりする。なお、次に、やや長文であるが、『記』のニニギの降臨の部分に記載する。今後の文章の発展を考えるならば、どうしても引用しなければならぬ部分である。がまんして、お読みいただきたい。

「……爾に天照大御神、高木神の命以て、太子正勝吾勝速日天忍穗耳命に詔りたまはく、今葦原中国平け訖へぬと白す。故に言依さし賜へりし隨に、降り坐して知看せとのりたまひき。爾に其の太子正勝吾勝速日天忍穗耳命の答白したまはく、僕は降りなむ装束せし間に、子生れましつ。名は天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命、比の子を降すべし、とまをしまひき。此の御子は、高木神の女萬幡豊秋津師比賣命に御合ひまして、生みませる子、天火明命、次に日子番能邇邇芸命にます。

（二柱。）是を以て白したまふ隨に、日子番能邇邇芸命に科

せて、此の豊草原水穂国は、汝知さむ国なり、と言依さし賜ふ。故れ命の隨に天降りますべしとのりたまひき。爾に日子番能邇邇藝命、天降りまさむとする時に、天之八衡に居て、上は高天原を光し、下は葦原中国を光す神、是に有り。故れ爾に天照大御神、高木神の命以て、天宇受賣神に、汝は手弱女人なれども、いむかふ神と面勝つ神なり。故れ専ら汝往きて問はむは、吾が御子の天降りまさむと爲る道を、誰ぞ此く居ると問へ、と詔りたまひき。故れ問はせ賜ふ時に答へ白さく、僕は国神名は猿田毘古神なり。出で居る所以は、天神の御子天降り坐すと聞きつる故に、御前に任へ奉らむとして、参向へ待ふぞ、とまをしたまひき。爾に天兒屋命、布刀玉命、天宇受賣命、伊斯許理度賣命、玉祖命、井せて五併緒を支り加へて、天降りまさしめたまひき。是に其のをきし八尺句、鏡、及草那藝劍、亦常世思、金神、手力男神、天石門別神を副へ賜ひて、詔りたまへらくは、此の鏡は専ら我が御魂と爲て、吾が前を拝くがごと、いつき奉れ。次に思、金神は前の事を取り持ちて、政爲よ、とのりたまひき。此の二柱の神は、佐久久斯侶伊須受能宮に拝きまつる。次に登由宇氣神、此は外宮の度相に坐す神なり。次に天石戸別神、亦名は櫛石窓神とも謂す。此の神は御門の神なり。次に手力男神は佐那縣に坐せり。故れ其の天兒屋命は、中臣連等の祖、布刀玉命は、忌部首等の祖、天宇受賣命は、女君等の祖、伊斯許理度賣命は、鏡作、連寺の祖、玉祖命は、玉祖連寺の祖なり。故れ爾に天津日子番能邇邇藝命、天之石位を離れ、天之八重多那雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天浮橋にうきじまりそりたして、竺紫日向之高千穂之久士布流多氣に天降り坐しき。故れ爾に天忍日命、天津久米

に、とのりたまへば、僕は得白さじ。僕が父、大山津見神ぞ白さむと告白したまひき。故れ其の父、大山津見神に乞ひに遣しける時に、大く歡喜びて、其の姉石長比賣を副へて、百取机代之物を持たしめて奉出しき。故れ爾に其の姉は甚凶醜きに因りて、見畏みて、返し送りましたまひて、唯其の弟、木花之佐久夜毘賣をのみ留めて、一夜婿爲たまひき。爾に大山津見神、石長比賣を返したまへるに因りて、大く恥ぢて白し送りましたまひける言は、我が女二り竝べて立奉れる由は、石長比賣を使はしてば、天神の御子の命は、雨零り風吹けども、恒なること石の如く、常堅に不動に坐しませ。亦木花之佐久夜毘賣を使はしてば、木の花の榮ゆるが如く、榮え坐せと宇氣比て貢進りき。此るに今石長比賣を返して、木花之佐久夜毘賣獨留めたまひつれば、天神の御子の御壽の木の花のあまひのみ坐しまさむとす、とまをしたまひき。故れ是を以て今に至るまで、天皇命等の御命長くましまさざるなり。故れ後に木花之佐久夜毘賣 参出て白したまはく、妾妊身るを、今産むべき時に臨りぬ。是の天神の御子、私に産みまするべきにあらず、故れ請す、とまをしたまひき。爾に詔りたまはく、佐久夜毘賣、一宿にや妊める。是は我が子に非ず。必ず国神の子にこそあらめ、とのりたまへば、爾ち、吾が妊める子、若し国神の子ならむには、産むこと幸からじ。若し天神の御子にまさば幸からむ、と告白して、即ち戸無き八尋殿を作りて、其の殿内に入りまして、土以て塗り塞ぎて、産ます時に方りて、其の殿に火を著けてなも産ましける。故れ其の火の盛りに燃ゆる時に生れませる子の名は、火照命。此は隼人阿多君の祖。次に生れませる子の名は、火須勢理命。次に生れませる子の御名は火遠理命、亦名は天津日高日子德德手見命。

命二人、天之石甕を取り負ひ、頭椎之大刀を取り備き、天之波士弓を取り持ち、天之真鹿兒矢を手挟み、御前に立たして仕へ奉りき。故れ其の天忍日命、此は伴連等の祖。天津久米命、此は久米直等の祖なり。是に詔りたまはく、此地は韓国に向ひ、笠沙之御前に真來通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故れ此地ぞ甚吉き地、と詔りたまひて、底津石根に宮柱ふとしり、高天原に氷椽たかしりて坐しましき。故れ爾に天宇受賣命に詔りたまはく、此の御前に立ちて仕へ奉れりし猿田毘古大神をば、専ら願し申せる汝、送れ奉れ。亦其の神の御名は、汝負ひて仕へ奉れとのりたまひき。是を以て、猿女君等、其の猿田毘古神の名を負ひて、男女を猿女君と呼ぶ事、是なり、故れ其の田毘古神、阿邪訶に坐しける時に、漁爲て比良夫貝に其の手を昨ひ合さえて、海監に沈溺れたまひき。故れ其の底に沈み居たまふ時の名を底度久御魂と謂し、其の海水のつたつ時の名を都夫多津御魂と謂し、其のあわさく時の名を阿和佐久御魂と謂す。是に、田毘古神を送りて、還り到りて、乃ち悉に鰭広物、鰭狭物を追ひ聚めて、汝は天神の御子に仕へ奉らむと問言ふ時に、諸の魚ども皆、仕へ奉らむと白す中に、海鼠白さず。爾れ天宇受賣命海鼠に謂ひけらく、此の口や答せぬ口、と云ひて、紐小刀以て其の口を折きき、故れ今に海鼠の口折けたり。是か以て、御世御世、鳴之速贊、獻る時に、猿女君等に給ふなり。是に天津日高日子番能邇邇藝命、笠沙の御前に麗き美人の遇へるに、爾ち誰が女ぞと問ひたまへば、答へ白したまはく、大山津見神の女、名は神阿多都比賣、亦名は木花之佐久夜毘賣と謂したまひき。又、汝が兄弟有りやと問ひたまへば、我が姉石長比賣在りと告白したまひき。爾れ詔りたまはく、吾汝に目合せむと欲ふは奈何

(三柱。) 故れ火照命は海佐知毘古と爲て、鰭広物、鰭狭物を取りたまひ、火遠理命は山佐知毘古と爲て、毛物、毛柔物を取りたまひき。爾に火遠理命、其の兄火照命に、各に佐知を相易へて用ひてむと謂ひて、三度乞はししかども、許さざりき。然れども遂に織に得相易へたまひき。爾れ火遠理命、海佐知を以て魚釣らすに、都て一魚も得たまはず。亦其の釣をさへ海に失ひたまひき。是に其の兄火照命、其の釣を乞ひて、山佐知も己が佐知佐知、海佐知も己が佐知佐知、今は各、佐知返さむと謂ふ時に、其の弟火遠理命、答白りたまはく、汝の釣は、魚釣りしに、一魚も得ずて、遂に海に失ひてき、とのりたまへども、其の兄強ちに乞ひ微りき。故れ其の弟、御佩の十拳劍を破りて、五百釣を作りて償ひたまへども取らず。亦一千釣を作りて償ひたまへども、受けずて、猶其の正本の釣を得むとぞ云ひける。是に其の弟、海辺に泣き思ひて居ます時に、監椎神来て問ひけらく、何にぞ虚空津日高の泣き思ひたまふ所由はとへば、答言へたまはく、我兄と釣を易へて、其の釣を失ひてき。是て其の釣を乞ふ故に、多の釣を償ひしかども受けずて、猶其の本の釣を得むと云ふなり。故れ泣き思ふとのりたまひき。爾に監椎神、我汝が命の爲に善き議、作むと云ひて、即ち無目勝間之小船を造りて、其の船に載せまつりて、教へけらく、我其の船を押し流さば、差暫し往てませ。味御路有らむ。乃ち其の道に乗りて往まじなば、魚鱗の如造れる宮室、其れ綿津見神の宮なり。其の神の御門に到りまじなば、傍なる井の上に湯津香木有らむ。故れ其の木の上に坐しまさば、其の海神の女、見て相議らむ者ぞ、とをしへまつりき。故れ教の隨に少し行でまじけるに、備さに其の言の如くなりしかば、即ち其の香木に登りて坐し

ましき。爾に海神の女豊玉毘賣の從婢、玉器を持ちて水酌まむとする時に、井に光あり。仰ぎて見れば、麗しき丈夫有り。甚異奇と以為ひき。爾れ火遠理命、其の婢を見たまひて、水を得しめよと乞ひたまふ。婢乃ち水を酌みて、玉器に入れて貢進りき。爾に水をば飲みたまはずして、御の珠を解かして、口に含みて、其の玉器に唾き入れたまひき。是に其のい、器に著きて、婢を得離たず。故れ著けながら豊玉毘賣命に進りき。爾れ其の珠を見て、婢に若し門の外に人有りやと問ひたまへば、我が井の上へ香木の上に人坐す。甚麗しき丈夫にます。我が王にも益りて甚貴し。故れ其の人手を乞はせる故に奉りしかば、水をば飲ますて、此のをなも唾き入れたまへる。是得離たぬ故に、入れながら將ち来て、献りぬと答白しき。爾れ豊玉毘賣命奇しと思はして、出で見て、乃ち見感でて、目合して、其の父に、吾が門に麗しき人有すと白したまひき。爾に海神自ら出で見て、此の人は天津日高の御子、虚空津日高にませりと云ひて、即ち内に率て入れまつりて、美智の皮の疊八重を敷き、亦施疊八重を其の上に敷きて、其の上に坐せまつりて、百取机代物を具へて、御饗為て、即ち其の女豊玉毘賣を婚せまつりき。故れ三年といふまで其の国に住みたまひき。是に火遠理命其の初の事思ほして、大きな歎一つしたまひき。故れ豊玉毘賣命、其の歎を聞かして、其の父に白したまはく、三年住みたまへども、恒は歎かすことも無かりしに、今夜大きな歎一つ為たまひつるは、若し何の由故有るにか、と言したまへば、其の父の大神、其の聳夫に問ひまつらく、今日我が女の語を聞けば、三年坐しませども、恒は歎かす事も無かりしに、今夜大きな歎為たまひつと云せり。若し由有りや。亦此間に到ませる由は奈何

にぞ、ととひまつりき。爾れ其の大神に、備さ其の兄の失せにし鉤を罰れる状を語りたまひき。是を以て海神、悉に海之大小魚を召ひ集めて、若し此の鉤を取れる魚有りやと問ひたまふ。故れ諸の魚ども白さく、頃者赤海魚なも喉に鯁ありて、物得食はずと愁ふなれば、必ず是れ取りつらむとまをしき。是に赤海鯛魚の喉を探りしかば鉤有り。即ち取り出でて清洗して、火遠理命に奉る時に、其の綿津見大神海へまつりけらく、此の鉤を其の兄に給はむ時に言りたまはむ状は、此の鉤は淤煩鉤、須須鉤、貧鉤、宇流鉤と云ひて、後手に賜へ。然して其の兄高田を作らば、汝が命は下田を営りたまへ。其の兄下田を作らば、汝が命は高田を営りたまへ。然為たまはば、吾水を掌れば、三年の間必ず其の兄貧窮しくなりなむ。若し其然為たまふ事を恨みて攻戦めなば、監盈珠を出して溺らし、若し其愁ひ請さば、監乾珠を出して活し、如此して惣苦めたまへと云して、監盈珠、監乾珠并せて両箇を授けまつりて、即ち悉に鯛どもを召し集めて、問ひたまはく、今天津日高の御子、虚空津日高、上国に幸でまさむとす。誰は幾日に送り奉りて覆奏さむ、ととひたまひき。故れ各身の尋長の隨に、日を限りて白す中に、一尋和邇、僕は一日に送りまつりて還り来なむと白す。故れ其の一尋和邇に、然らば汝送り奉りてよ。若し海中を渡る時に、な煌畏ませまつりそと告りて、即ち其の和邇のに載せまつりて、送り出しまつりき。故れ期が如く、一日の内に送り奉りき。其の和邇返りなむとせし時に、佩かせる紐小刀を解かして、其のゝに著けてなも返したまひける。故れ其の一尋和邇をば、今に佐比持神とぞ謂ふなる。……」

やや、長文となったが、ここで、ポイントを少し整理しておきたい。

(イ) 猿田彦も海に關係ある神である。―すなわち、海人族である。
ニニギ（騎馬系）に従属した海人族であると解する。
(ロ) 天之宇受売と猿田彦が猿女の祖となる。―中世賤民のホカイビトの系譜である。

(ハ) ニニギノミコトは、大山津見神（山の民）の娘の木花之佐久夜毘売を娶とる。―ニニギは、騎馬民族系であり、遊牧民である山の民（農耕民族でない）から妻をめとる。

(ニ) 火の名を持つ山幸彦と海幸彦の話―ニニギの正統な後継者である火遠理命（ほをりのみこと）―山幸彦は、山の民としてえがかれており、海民の海幸彦の生活圏をおびやかすが、海幸彦系海人族よりも勢力の大きい（日向族）綿津見神系海人族と手を結ぶことにより、海幸彦系海人族を追いおとした。と解釈する。

二 山幸彦と山幸彦

山幸彦すなわち火遠理命（ほをりのみこと）は、「天津日高日子穗穗手見命」ともいい「虚空津日高」ともいうが、騎馬民族系ニニギノミコトの直系であり、「神武天皇」の祖父ともなる神である。

そして、九州の海幸彦系海人族や綿津見神系海人族は、南方渡来民族で、第二次、第三次というように、数波に分けて日本列島へ漂着した海人族の子孫ではないだろうか。

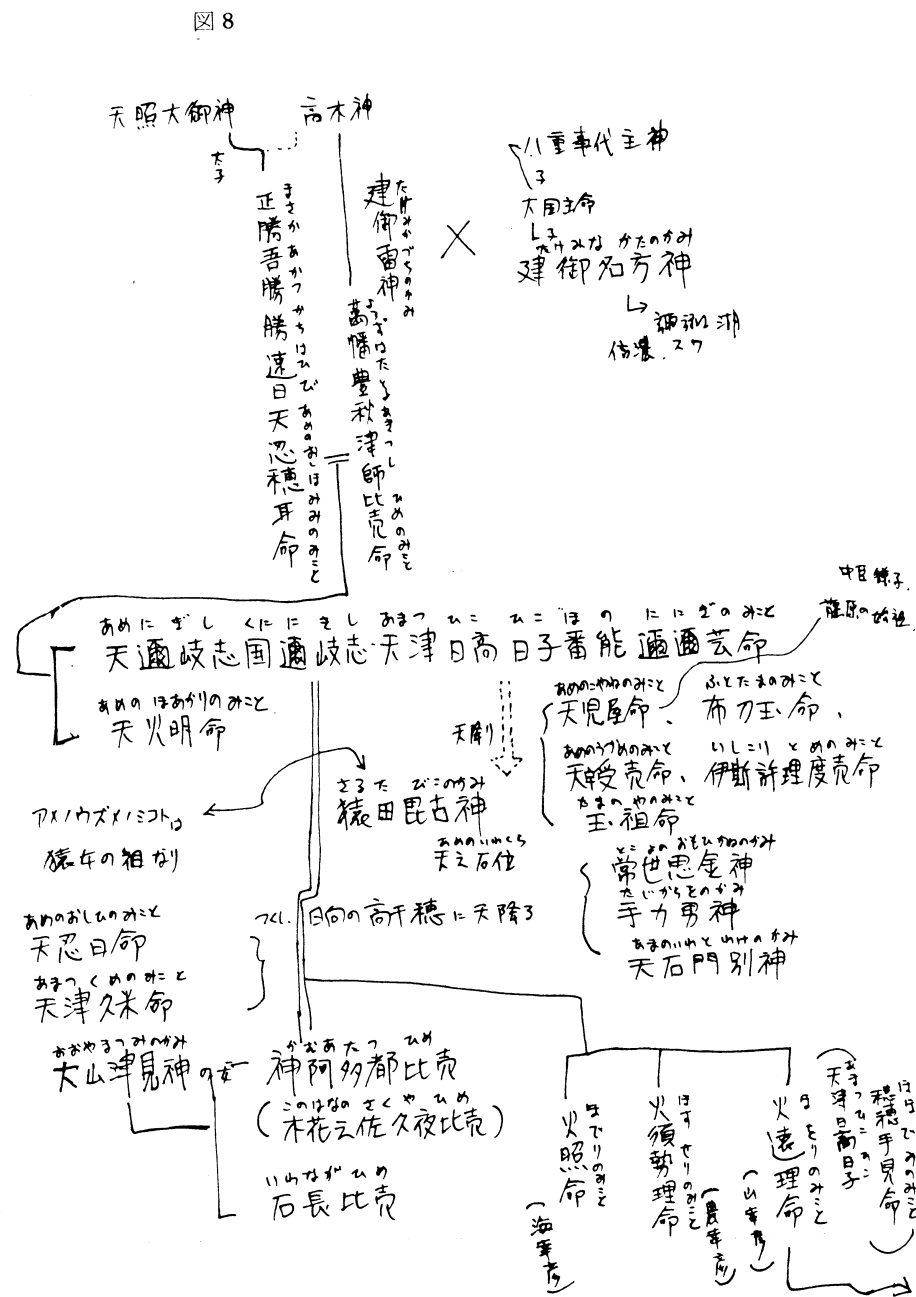
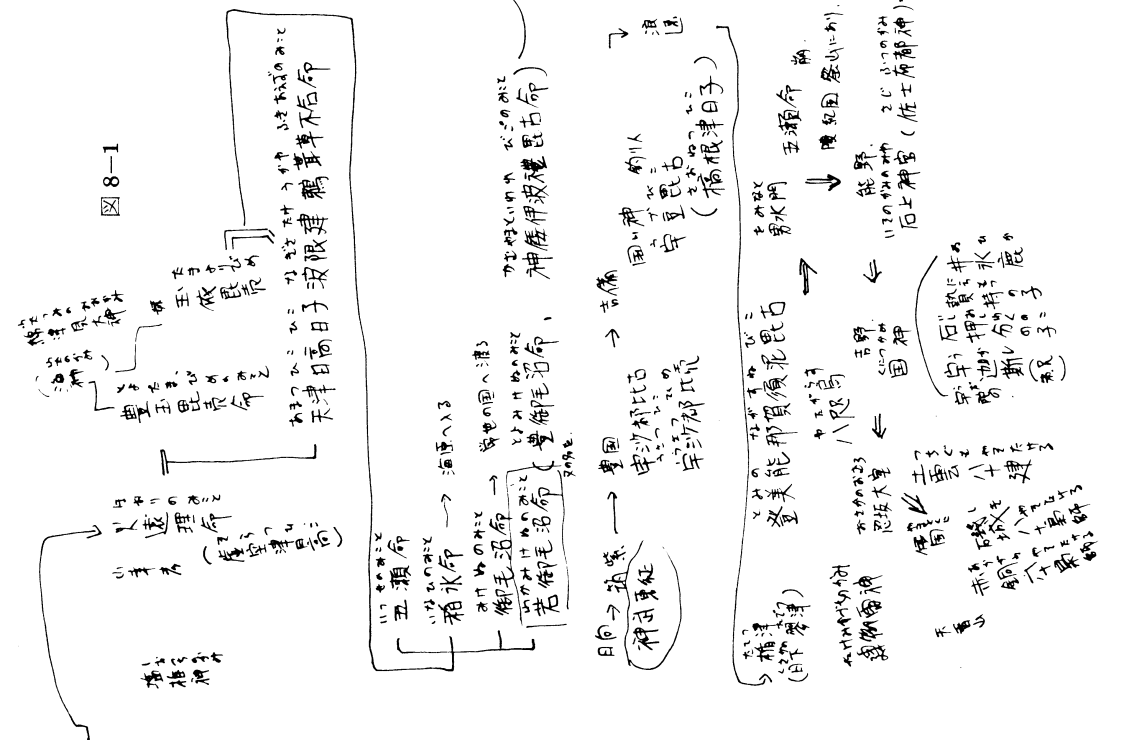
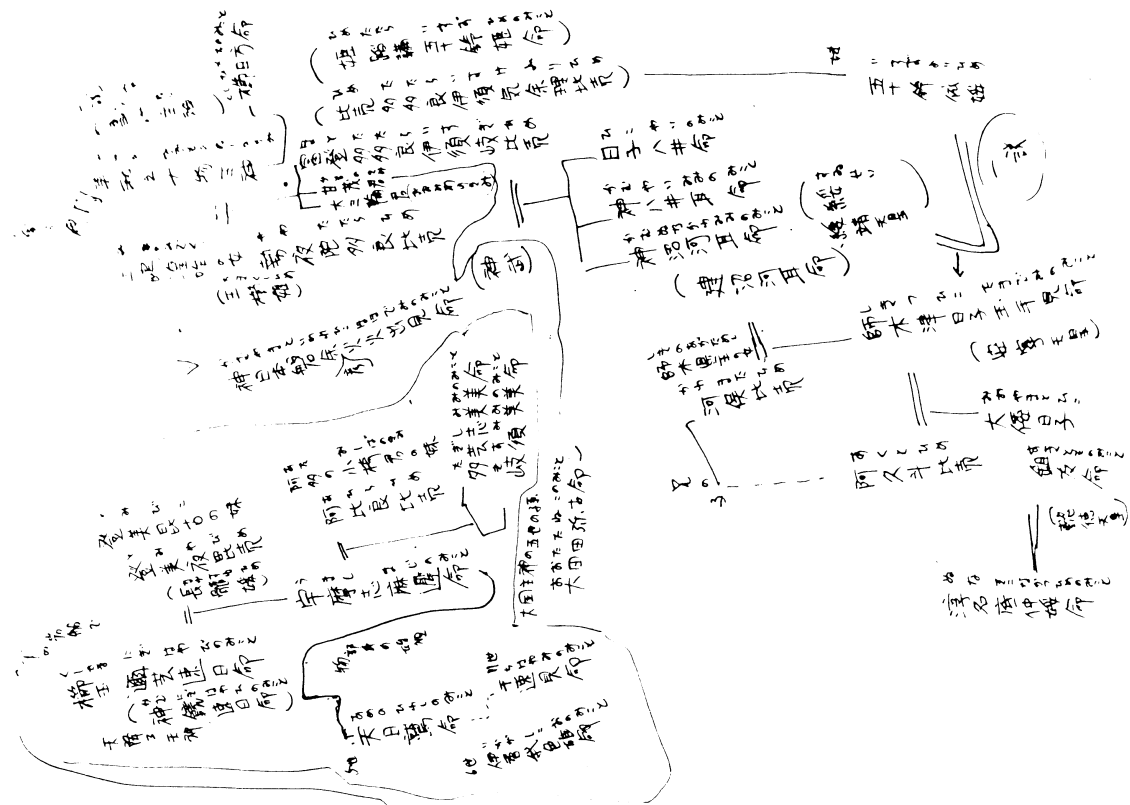
この海人族の主流派が、琵琶湖まで北上し、そこに近江高天原―天の朝をつくったのではないかと考える。

事実、『記』では、火照命（海幸彦）を隼人族の祖としているところから、おそらく、隼人族は、天の朝を形成した海人族よりも遅れて、南九州へ上陸した海人族ではないだろうか。彼らはポリネシア系で、非天の朝系であった。

大陸から扶余族系又はテュルク系又は弁辰韓系又は燕人系騎馬民族武装集団が、朝鮮半島を経由して、九州へ上陸した当時、中国は、五胡十六国の時代であり、すでに、九州地方には、南方より渡来（ペルシア・インドシナ・マレー・ポリネシアより）した海人族の諸部族が弥生土器文化をもち、祭祀国家を、それぞれ形成していたのである。新らしく、日本列島へ侵入した大陸系騎馬民族は、馬と鉄製の武器こそ持っていたが、圧倒的に少数であったため、綿津見神系の海人族の部族と同盟を結び、隼人族やその他の海人族を打ち払い、そこへ（日向国）支配圏をうちたてたのではないだろうか。

その国の王朝名を山幸彦と豊玉毘賣命（綿津見神系海人族―日向族）の間に起きた子の『天津日高日子波限建鵜草草不合命』

※注 7
祭祀国家―豪族と呼ぶ方がよいだろう。
当時は、各地に大王がいて、天皇もそのうちの一人であった。
当時あった国家は、「葛城王朝」「三輪王朝」「河内王朝」「近江王朝」「吉備王朝」「出雲王朝」「筑紫王朝」の7古代王朝である。とされている。



の名前をとって、これを「ウガヤフキアエズ朝」という。
この「ウガヤフキアエズ朝」と、豊玉毘売命の妹の玉依毘売との間に四人の子が生まれる。すなわち、「五瀬命」、「稻水命」、「御毛沼命」と、「若御毛沼命」である。この「若御毛沼命」と

そ、豊御毛沼命とも「神倭伊波礼毘古火火出見命」とも呼ばれる「神武天皇」である。神武のことは次にゆるとして、まず、次の表を参照ねがいたい。「天忍穗耳命」から、「神武」までの「記」による系図である。

三 神武天皇（カムヤマトイワレヒコ）

奈良時代後期に一括して贈られた天皇の漢風諡号中、神のつく天皇は、神武・崇神・応神の三天皇である。これは偶然であろうか。私は、これは、仏教でいうところの仏身観の法・報・応の三身一体観ではないだろうか考えた。神武と崇神は同一人物であるとも云われるが、神功皇后をふくめて「神」が使われる天皇には、新王朝を示す何らかの伝承あるいは作りだされた神話が存在することを表わしているのではないかと思う。ついでに云うと、「天智・天武」とした大化改新以後の二人の天皇への「天」のおくり名も同様な意図ではないかと思えるのである。

それでは、神武のことについて語ろう。が、そのまえに、今までの仮説を次のように整理しておきたい。

(イ) 神武を族長（大王）とする原ヤマト国の発祥地は、九州筑後川流域である。彼らは、大陸系騎馬民族であり、連合国として、海人族の一派である豪族を味方にしていた。

(ロ) 当時、畿内地方には、海人族系が、近江にイサナギを奉ずる氏族が天の朝高天原を、また大和には、オオナムチを奉ずる氏族が勢力を占めていて、連合政権を作っていた。おそらく、ニギハヤヒや、ナガスネヒコの海人族（部族・豪族）もこれに加盟していたのではあるまいか。この連合政権は、全国各地の海人族に大きな影響力をもっていた。（中国の本にも、「日本国」と「倭国」があったというように書いている。）

これに対して、神武天皇の東征が、海路を使って、日向・筑紫・豊国・吉備・浪速・橘津・男水門・能野・吉野と行なわれるのであるが、ニギハヤヒやオオナムチを奉ずる出雲族や近江高天原の天の朝の一部は帰順し、出雲族は、オオナムチを奉じて山陰の

出雲へ移住する。この時、帰順の和平交渉の使者の役割をはたしたのが事代主命である。

また、最後まで、抵抗戦をしたのが、ナガスネヒコであり、彼は、ついに敗走して奥州のみちのくまで落ちのびて、その先住民である荒吐族と共に蝦夷で勢力を拡大するのである。（『東日流外三郡誌』）

とにかく、神武天皇は、東征によって、各地の海人族系国家（豪族）を支配下に置き、奈良の橿原宮で、ハツクニシラスメラミコト（ハツクニシラスという名をもった天皇は、神武のほかに崇神がいる）として即位して、「大和朝廷」の基礎が確立するのである。

しかし、この「大和朝廷」に服従しない海人族（天の朝の残党）は、なお各地に散在していて、機会あるごとに、反乱をくわだて、大和政権をたおそうと、「蜂起」したり、血族によって、政権を奪取するのである。そういう彼らを、大和政権は、土グモ、蝦夷、タケル、クマンなどと呼んだのである。―（彼らは、中世にあっては「まつろわぬもの」として散所と呼ばれるゲッターに囲こまれて、賤民とされるのである。）

※注 8

神武東征の際、天皇の弓の上に止まった金色の鸛の説話があるが、この鸛こそ古代メソポタミアの神である。このことから、神武側について海人族は、古代オリエントから渡ってきた一派ではなかろうか。と考えられる。

※注 9

天日槍―天日槍は、新羅からの渡来人であるとされている。童王町スエや坂田郡、伊香郡に伝説されて、「天の羽衣伝説」も形成しているが、いちがいには新羅からの渡来人とはいえない。『風土記』『旧事本紀』などに天（アマ）のつく国守がたくさんでてくるが、おそらく天日槍は、天の朝の近江高天原の一員ではなかっただろうかと考える。『記・紀』編集のなかで大和朝につごうのよいように外来人としたのではないだろうか。木ノ本の「天羽衣伝説」は、菅原道真の天神伝説とつながっている。

※注 10

日牟礼八幡宮―元は

5 天皇の系譜

一 応神天皇

まずはじめに、『日本書紀』から抜きだした、「神武天皇」から「持統天皇」までの系譜をみていただきたい。

例を近江にとれば、ヤマトタケルが、伊吹族（天の朝の残党）に苦しめられる話とか、「天日槍」の系譜をもった湖北地方の息長氏族（息長氏族は、朝鮮新羅から若狭経由で渡来した海人族であるとされている。）と天皇家の関係（息長氏族出身の息長帯姫が仲哀天皇と結婚し、神功皇后となり、また菟田別命＝応神天皇を生むのである。）などが、よく知られているところである。現在でも、人を怒る時「このアマツ」というが、それは、この時の名残りではないだろうか。

なお、神話についての話しは、これで終るところであるが、話題が、応神天皇にまで及んだので、若干であるが、わが「日牟礼八幡宮」の祭神でもある「応神天皇」のことについても記しておきたい。

天皇名			
1	神武天皇	11	仁行
2	武靖	12	景成
3	安寧	13	仲志
4	懿德	14	志仁
5	孝昭	15	履反
6	孝安	16	允安
7	孝元	17	孝元
8	孝元	18	孝元
9	孝元	19	孝元
10	孝元	20	孝元

略寧宗賢烈体閑化明達
雄看頭仁武継安宣欽敏

明峻古明極徳明智文武統
用崇推舒皇孝有天弘天持

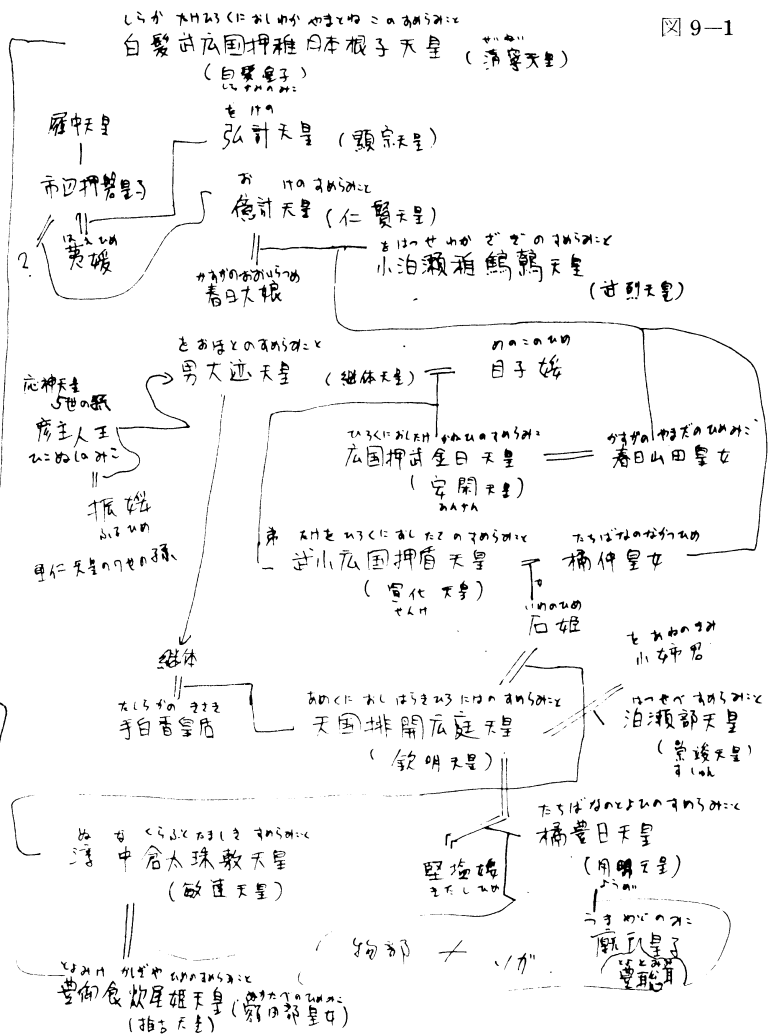
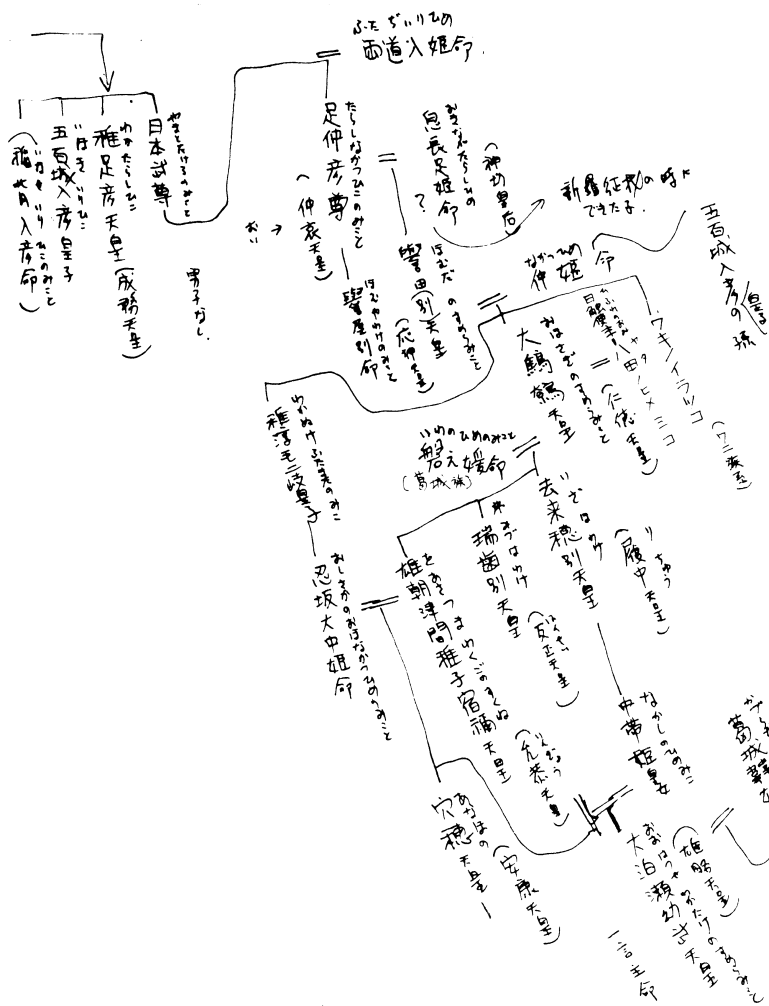
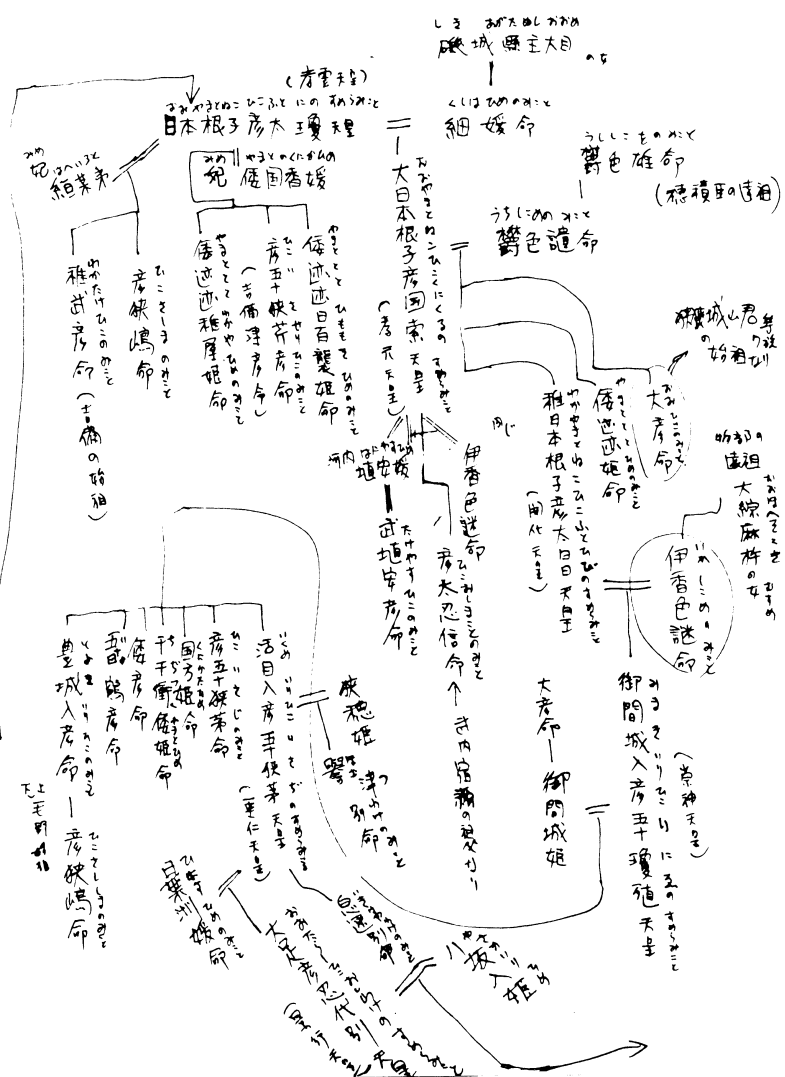
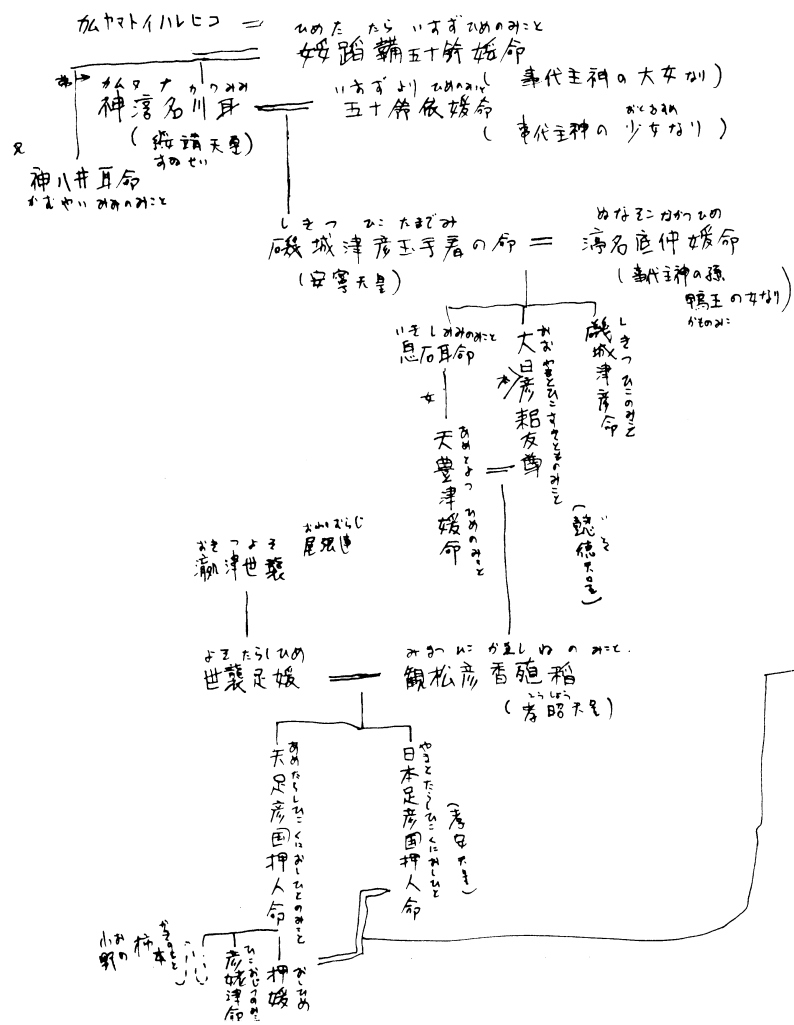
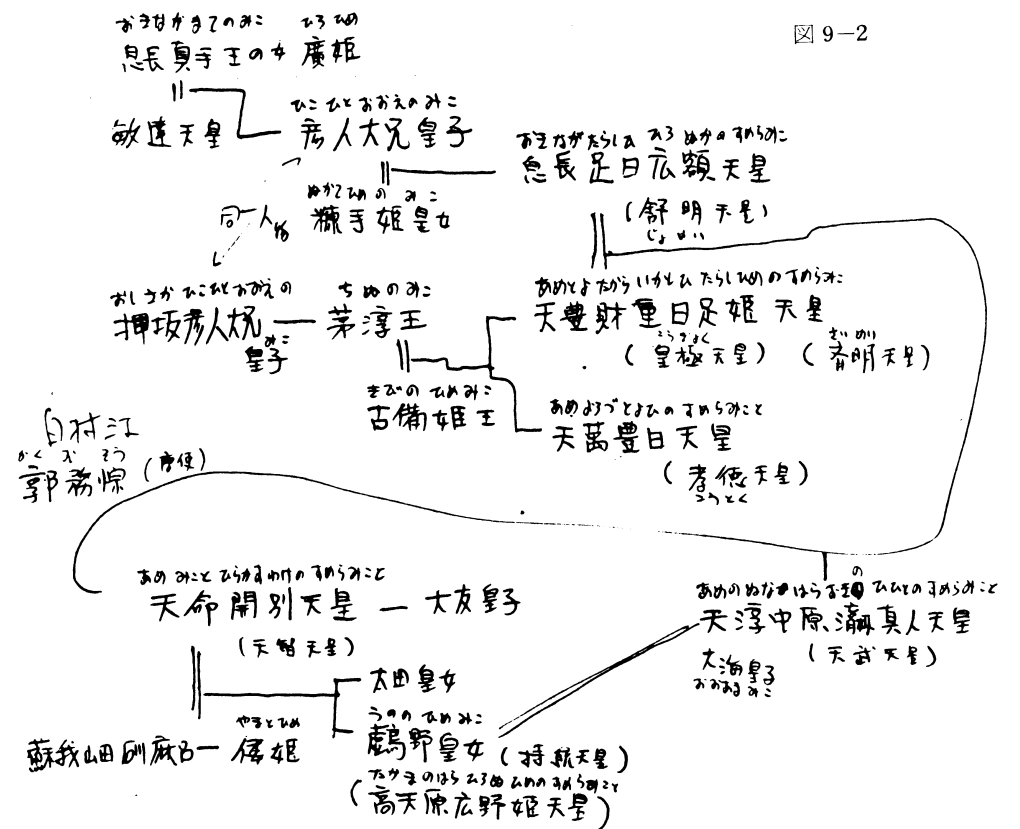


図9-1

図9 【日本書紀】





何度もいうようだが、応神天皇の母とされる神功皇后は、天の朝（息長氏）の系統の女性であり、大和朝は、神功皇后と婚姻（くわんこん）によって、その基礎を固めたのであるが、では、大多数の天の朝の民はどうしたのか。すなわち、次の㉠、㉡が考えられる。

① 皇孫系支配者（大和朝廷）に降服して、農奴・奴百姓となつた人々

⑤ 崇神朝・仁徳朝・播磨朝・継体朝などの支配に服せず、農奴となることを拒否して、山に或いは、海辺に逃げこんで、レジスタンスを続けた反体制の徒（ヤマトタケルの東征として『記・紀』には表現されている。）

しかし、当時、日本には、まだまだ縄文人的要素を持った人々が東日本の山岳地帯その他になお残っていたのである。ナガスネヒコは、神武の東征に敗れて、東北のそういう人々の中へ逃げ込んだのである。日本への水田文化の侵攻は、弥生文化の始まる紀元前三世紀ごろから始まっているわけだが、それが、権力的「稲作」水田文化として、一挙に大規模化したのは、四世紀半ばの仁徳朝（河内王朝）以後と考えられている。

ここで、少し説明を加えておくと、騎馬民族系征服王朝にも百濟系・高句麗系などがある。朝鮮三国は、日本列島にそれぞれ植民地としてのコロニーを作っていたが、大和での覇権を争っていたのである。そして、最終的に主導権をとるのが百濟系仁徳王朝であり、高句麗系の騎馬民族出身の崇神王朝は、仁徳王朝によって追放されるのである。高句麗系に比べ、百濟の王朝は、騎馬民族出身ではあるけれども、百濟に来て農耕民族の支配者として定着し、より中国型王朝に近い性格を持つようになった。百濟系の濃厚な河内王朝は、それゆえ、中国型と百濟型をモデルとして、

日本列島の中央部に、権力的稲作文化を確立したのである。そして、なにより、騎馬民族の性格を残していた、高句麗出身の征服王朝を打倒し、その残党は、主に関東地方に逃れたというのである。――いわゆる源氏と呼ばれる人々は、高句麗系の騎馬民族の子孫たちであると、八切止夫氏はいう。――（これが第二の原住民である。第一は、天の朝の残党。）

それでは、第十五代応神天皇のことについて記しておこう。応神天皇は、その母である息長帯姫（おきながたらしめ） 神功皇后が、〃新羅（三韓）征伐〃（当時の日本の情勢をみるかぎり、大和朝廷が、朝鮮まで出兵するなんて国力は、とうていがない。おそらく作り話であろうとされている。それこそ、現在でいうならば、アメリカやソ連に対して、アメリカや南半球の一小国が戦争をしかけるようなものである。）の時に、浪速の「住吉大社」におまいりして、妊娠した子供である。なお父親については、不明である。

（なお、三韓について『倭人伝』にいうところの、モウリ末盧国は、弁辰の支配をうけている国であり、投馬国が出雲国であって、馬韓の支配をうけているとする説もある。）

母である息長帯姫は、天の朝（海人族）

比牟（布）礼庄のヒムレ族の神社である。ホンダ7ヶが大王となったとき、各方面より后妃を選んだが、その中に和邇臣の祖先とされる「日触使主」というものの娘がいたと『記・紀』にある。この「ヒフレノオミ」こそ比牟（布）礼庄＝八幡の豪族ではないだろうか。ヒムレ族はワニ部族の一氏族であろう。

である。また「住吉大社」の祭神は、底筒男神・中筒男神・上筒男神の三航海神であり、これまた海人族に關係ある。これらから想像するに、応神天皇は、大和朝廷にくだり入った天の朝系の人物であると考えられる。(本来の八幡神(ヤワタ神)と応神天皇は別のものであったが、いつのころより(古代)か、八幡社の祭神は応神天皇となっている。これについてもくわしい研究が必要。)それゆえ、応神天皇(誉田別命)は、八幡神社に祭神として祭られていると考えるのである。八世紀にできたという『大宝律令集解』にも『夷人雑類とは何かといえ、毛人、肥人、阿麻弥の三種なり』と定義しているが、アマの朝の弥(八)の民、そして農耕をせず野生の木の実や魚を捕えて食する毛人、それに九州の肥人(天の朝の残党)の三種類が、あくまで王化になびかず、レジスタンスを続ける反体制の徒として、夷人として別視されているように、天の朝の残党で「ヤ(八)」のつく民は、たえず、大和政権に反逆していたのである。そして、この「ヤの民(八衆)」が、信仰する土俗の神が「八幡神社」である。同じように、狩猟や魚をとって生活していた人々が信仰するのが「夷荷(イナリ)」であり、「夷(えびす)」なのである。――(鹿島・香取神宮は、天の朝の東北・関東での前線基地である。)

こういう点でいえば、これは、非常に部落史と深く結びついているのがわかる。これについては、私のかいた「日本部落史の再考」あるいは「賤民史観の樹立を」を読んでいただきたい。(『解放』一号・三号)

しかし、この応神天皇の子とされる仁徳朝になると、再び天の朝系色は、消されて、百済系色彩が強くなる。しかし、それに反発した天の朝系残党は、執ように、大和政権をゆさぶりつづけ、

国が成立し、更に六一八年には唐帝国の建国となるのである。隋帝国では、儒学は、仏教・道教に圧倒された。仏教は、隋から朝鮮三国を経て、日本列島のその植民地に流入したのである。

仏教は、すなわち、隋・唐帝国の日本列島への文化的侵略の尖兵だったのである。

六四五年、皇極天皇四年、中大兄皇子は、大極殿で、蘇我入鹿を斬り、「大化改新」をおこなうのであるが、それは、百済系官僚主義の中央集権をつくることであった。

しかし、このことは、ただちに、六一八年に出現している大唐帝国に対して、強硬外交策を取ることである。唐は朝鮮半島征服戦を開始し、百済などは滅亡に瀕する。従って、これら朝鮮の日本での植民地国は、朝鮮本国の対唐戦を支援するため出兵を要求される。

大和・百済連合軍は、六六一年「白村江」で、唐・新羅連合軍によって潰滅される。同時に百済国も滅亡するのである。

こうして、敗戦国日本へ進駐してくるのが、唐軍の「郭務」である。唐側は、唐に挑戦した天智天皇を報復として暗殺した。そしてその子大友皇子が即位して「弘文天皇」となるや、大多数の宮廷貴族を買収して、弘文天皇を殺し、大海人皇子(新羅王ともいわれる)を天武天皇として立てたのである。

すなわち、王申の乱は、いろいろな政権をつくるための唐占領軍によるクーデターであったのである。

① 天武朝は、唐・新羅連合国の謀略によって生まれ、その後、執拗な唐・新羅の影響下におかれた。

② 占領軍は、朝鮮半島系だった日本仏教を、唐系仏教に切りかえた。そして、純唐系薬師寺がつけられ、宮中の仏教化が始ま

第十六代仁徳天皇以降、兄弟で、血を血で洗う攻争が続けられ、ついに第二十五代武烈天皇で仁徳朝は滅びさり、ここに、応神天皇の五世の孫とされる、越前の第二十六代継体天皇が越前・近江・河内の海人族系豪族と手をくんで継体朝をひらくのである。

二 白村江の敗戦

しかし、第三十一代用明天皇のとき、天皇は、天照大神を棄てて、仏門に帰依したい、と言いつくのである。おそらくこの背景には、朝鮮半島を経由して、たえず、大陸からの威圧、干渉が行こなわれたのであろうことは、安易に想像されるところである。

ニギハヤヒを祖とする物部守屋が、これに反対し、新羅(高句麗)系の蘇我馬子(蘇我氏族は、蘇我大陸系騎馬民族である。)が、これを推進した。結果、この闘争は、仏教推進派の完勝で終り、敗けた物部氏の残党は、奥州へおちのびていくのである。(前述)

勝った方の蘇我氏は、その後、馬子―蝦夷―入鹿と興隆を続け、東漢人を背景に「蘇我王朝」を形成するにいたったのである。

この時期、中国大陆では、五八一年隋帝

った。

③ 大宝律令は、唐占領軍の押しつけ憲法である。

④ 唐は、平和無抵抗主義の仏教をひろめて、日本の対唐抵抗の気力をなくし、国力消耗策として遷都、国分寺の建設を強要した。この結果、苛酷な納税と徴用となる。

⑤ 唐のカイライ政権は、唐化に服属しない、旧日本勢力(特に、関東以北)に対して、「蝦夷征伐」を最大の国家目標として突進する。

⑥ しかし、七五五年―七六三年の安祿山・史思明の乱を転機とする唐本国の衰退と、日本に対する唐の権力の弱体化に乗じて、奈良期末期、唐に亡ぼされた百済系貴族(豪族)が、桓武(七八一年即位)―藤原のコンピで、日本の国政を支配下におき、彼ら自身が日本化しはじめ、ここに日本文化が定着するのである。平安時代初期の文学がすべて漢文で書いているのもこのためである。

ここで注意しておきたいのは、藤原氏についてである。藤原氏の祖は、もと「中臣鎌足」で、天智天皇の参謀長である。(中臣氏は、当時神宮の総支配をつかさどってい

※注11

ヤの民、ハチの民というの、反体制の族長クラスの人々である。ヤマトノオロチと同じく、鉄製造技術をもっており、中世には鉢(ハチ)とされる。非農耕民で賤民とされていく人々である。「オシラ様」を祭る白山信徒と同種であろう。

※注12

八幡神―八幡神の起源はヤバタ神―ヤマトヨで、それは邪馬台国で祭られたもので、銅鏡文化であると考えられる。その中心は、国東半島の宇佐八幡宮である。また八幡神は仏教が百済から導入されるにおよんで、「八幡大菩薩」となり、仏教と融合した。応神天皇は、大自存菩薩のうまれかわりで

あるとする説がのっている。このヤハタ神の発生については、いまだに疑問がつかない。ついでに記すが、これはまったく関係のないことであるが、「八幡大菩薩」と書いた旗を立てて、中国近海を荒しまわったとされる「バハン船」は、実は日本人ではなく、バハン半島(ベトナム)の住民たちであることが話されているため、あれは作り話である。

※注13

天武系は、持統―文武―元明―元正―聖武―孝謙―淳仁と続くが、その後の天皇の光仁―桓武―平城―嵯峨は、天智天皇系統である。天武天皇は、新羅系だが、天智天皇は百済系であることは、まえにものべたとおりである。

たといわれる。)

六六九年、すなわち白村江敗戦後六年、『天智天皇は、皇太子大海人皇子を病あつて鎌足邸に遣はして藤原姓を賜ふ』と『日本書紀』にある。しかし、この時、すでに唐占領軍は全権を掌握していたのであるから、この種のことは、彼らの介入なしには行なわれ得ない。良く考えてみると、中臣・藤原という改姓は、同時に中臣という姓の廃止でもある。この中臣氏は、崇神天皇の御代に鹿島大神を顕かし奉ったと『常陸風土記』に書かれてある。つまり、崇神征服王朝の一員であったわけである。このことについては、神話の中でニギノミコトが降臨するときに、中臣氏の祖とされる「天児屋命」が、従行したと記したところがあるので、それでご理解願がえると思う。この「中臣鎌足」を「郭務儔」を中心とする唐占領軍が放置しておくはずがない。この視点から事態を再検討すると、次のごとく、私は推論を得ることができる。

第一 唐占領軍は、天智天皇とともに、中臣鎌足をも暗殺した。そして、彼らは、中臣氏そのものを歴史から抹殺するため、藤原(トウゲン)という姓を与えたという作り話を歴史に記録した。

第二 さらに、鎌足の長男の貞慧をも暗殺し、次男という形で、藤原不比等(唐占領軍の体制の中の重要人物の化けた姿である。)をおくり込み、系図を偽造した。という推定。
*¹⁴ 藤原不比等という人物は、『記・紀』の編集、律令の編集の中心人物であったといわれている。つまり、唐・新羅連合国の日本占領政策の総仕上げの役割を果たしたのである。完全に唐側の人間であるといわねばならない。

記念日というのは、支配権力がつくったまったくの作り話であることを明らかにしておきたい。
そもそも、『記・紀』で読みとるかぎりにおいても、万世一系は、ありえないのである。

6 むすびにかえて

『天皇アラブ渡来説』というのがある。スメラミコト(天皇)のスメラというのは、アラブⅡペルシア地方にあるスメラ山脈が由来であるとか、伊勢の神宮には、ダビデの星(☆)が示してあるとか書いてあった。古代メソポタミアの彼らは「拜火教」である。もし、彼らが、神話期に、渡来しているならば、「火照命」とか「天之火明命」、「火火出見命」とか、「火」のつく神々の時であろう。また「ヤ」のつく民が祭る八幡社も、アラブ系「海神ヤ」の民のものであるとしている。中国の唐の時代には、長安では、ペルシア人が来ていたと資料にある。五胡十六国の時代に、アラブⅡペルシア系民族が、中国を戦場とし、その一派が、日本へ来てもふしぎではない。また、古代フェニキア人は、船を使って活動していたという。古代アラブⅡペルシア人が海路、日本へ渡来したのかもしれない。なにしろ、日本列島は、裏日本へは、ベーリング海・沿海州からの親潮寒流、太平洋岸へは、ペルシア湾・東南アジア方面から黒潮暖流が交互に打ち寄せていて、まるで挟み打ちみたいな吹き溜りだまりの位置にあるからして、アラブや沿海州方面からは、潮流にさえ巧くのれば、漂着して来られるのである。

大陸系騎馬民族の中に、彼ら(アラブ系)は、いたのかもしれない

九〇七年、^{*15}唐帝国は契丹により亡びた。唐の後期、その権力は衰退し、辺境の従属諸国に対する支配力も弱化した。九世紀末、日本は、日本化した天皇・貴族によって、独立の傾向を強めるのである。

そのあとは、みなさんも知っているように、ミナモトの民を自称する白山(白旗)系の蘇我系騎馬民族の子孫の源氏と、天の朝(海人族)の残党の子孫である北条氏が連合して、全国の八のつく民やその他非農耕民で賤にされた人々を結集させて、藤原政権をたおすのである。

さらに、鎌倉・室町・戦国期は彼ら賤民層を中心とした土一揆・一向一揆をおこし、近年になってからは、「米騒動」などが、彼ら原住民の子孫(天の朝・騎馬民族の末えい)によって、「蜂起」されていくのである。(七七〇年にも、東北・原住民が大規模に蜂起し、箱根山を越えて、攻めてきたことがある。ゆえに年号が、〃宝亀〃とあて字された。)

このように書くと、またしても部落問題とかかわってくるようになる。古代史であっても、部落史というのは、たいへん大事なところにあるのである。

また、この場において、二・一一の建国

いし、南方渡来の海人族の中に、いたのかもしれない。^{*16}これについては、なお、研究の余地を残すものである。
とにかく、藤原不比等とよぶ個人か、グループか判らないが、すべての根元の迷は、「天皇は、万世一系で、その祖神は、天から天降ってきた」とする『記・紀』にあるようである。彼らは歴史を偽造したのである。

また、天皇を万世一系の貴い血筋とする觀念は、同時に、はっきりと賤種差別感を持つものである。つまり〃血の差別は上と下に向く〃のである。〆貴〆〆賤〆〆しかり、〆浄〆〆穢〆〆しかりである。このことを歴史から読みとってほしい。

私は、他の人より若干、部落史を深く研究するにおいて、天皇制及びその政府のもとの、天皇中心の歴史だけが、本当の歴史でないということを知った。天皇・貴族中心の歴史に対しては、部落史を対置して考えなければならぬと思っている。私の場合、部落史というのは、あらゆる物の見方の根底になっている。

そういう意味で、『記・紀』を調べてみたのである。こじつけかもしれないが、私が考えていたと通り、『神話』のなかにも、部落史の芽はあった。つまり、部落史は近世から

※注14

歴史では、藤原不比等に4人の子がありそれぞれ南家(武智麻呂)、北家(房前、武家(宇合)、京家(麻呂)を形成している。私はこれを唐占領軍の陸軍・海軍というような所屬を表わしたものでないだろうかと考えた。これら四家は、歴史上、派閥として政權を争っているが、宇合の子の広嗣の乱(七四〇年)、武智麻呂の子の仲麻呂の恵美押勝の乱(七六四年)や藤原子の乱がとくに有名である。なぜ彼らは、せっかく支配者階級の立場に立ちながら、反乱をおこさねばならなかったのか。この藤原四家のうち最も栄えるのは、房前、冬嗣、良房、時平、道長の北家である。

※注15

日本にも契丹系の人

々が移住していたが、唐系の藤原氏によって追われたとする。
すなわち天神(天満宮)信仰の人々である。彼らは中国本土のしかえしをうけたのである。

※注16

安曇族のアズとは、古代シュメール語を原基とした「曳船の人」というマレー語ににていると歴史言語学の分野ではいわれている。

ではなく、古代から、それも神代の時代より、つながっていたのである。ともかく記紀神話の中にこそ、日本人の謎をとくカギがあることはたしかである。

以上、思いつくまま書きました。なにぶん、系統的に古代史・神話研究をやっておりませんので、ご批判がありましたらおよせください。また、部落史については、私のレポート（『解放』第一号、第三号）をあわせておよみいただき、学習の教材にしてください。

一九八二年二月　I N I

参考文献

『原・日本人の謎』	邦光史郎	祥伝社
『神典（古事記・日本書紀）』	大倉精神文化研究所	
『八切日本列島原住民史』	八切止夫	日本シエル出版
『神武天皇実在論』	林　房雄	光文社
『古代近江王朝の全』	吾郷清彦	琵琶湖研究会
『近江高天原の発掘』	吾郷清彦	琵琶湖研究会
『日本原住民史序説』	太田　竜	新泉社
『新天皇系譜の研究』	角田三郎	オリジン出版 センター
『古事記は神話ではない』	桜井光堂	秋田書店

以上の文献や著書を参考にさせていただきました。諸先学に深く感謝いたします。

事務局だより

当推進委員会では、一九八二年度の活動計画を次のように決めました。会員のみならず、一般組合員・非組合員を問わず参加下さい。同和問題の解決は、行政職員すべての責務です。

○年間統一テーマ

「職場と部落解放とのかかわり」

― 差別事象から学ぶ ―

○年間活動計画

3月	市協との懇談会	9月	学習会（市行政との懇談会）
4月	「解放」4号発行	10月	狭山斗争
5月	学習会（水平社宣言に学ぶ）	11月	「解放」6号発行
6月	市協との懇談会	12月	学習会（差別に学ぶ）
7月	「解放」5号発行	1月	会員研修会
8月	学習会（差別に学ぶ）	2月	「解放」7号発行

当推進委員会も発足から、三年目になります。学習会等の内容も、また、会員も充実してきました。

（当推進委員会の方針で、管理職であっても、部落問題を学びたい方については、こばみません。会員になって、共に学んでください。）

○部落解放運動推進委員会構成員

推進委員長	竹中	稔					
事務局長	西川	秀夫					
山本	通生、	永福	正男、	高木	史郎、	金森	邦雄、
畠本	敏雄、	加藤	忠樹、	須田	智宏、	千菊	秀昭、
児玉	章宏、	谷	保文、	河井志げ美、	倉田	弥一、	
麻田	初男、	山本恵美子、	塚本	利夫、	井上	典子、	
大西	実、	辻沢	武男、	西堀	駒次、	仲江	正明、
西村	喜一、	山岡	緑朗、	三崎	昇、	西川	智之、
西	節子、	小泉登紀夫、	玉本	邦雄、	赤部	豊明、	
中江	義一、	堀	文孝、				

以上の会員で、現在の活動（学習・共闘）をおこなっておりますが、会員でない方も、ぜひ参加して下さいよう、再度お願い致します。何度も申しますが、「同和問題の解決は、行政職員のみならず国民すべての責務です。」―この同対審答申の主旨は、たとえ旧来の特措法が十三年で切れ、地域改善対策特別措置法という名称に変わろうとも、不変のものです。そのことを強調しておきたいと思います。私たちのいうところの『部落解放』とは、「部落を解放」（住・環境を良くする）ことだけでなく、「部落差別を解放」（部落差別をなくする）ことなのですから。